

【目次】

スウェーデン研究講座 第167回 2014年10月22日

「スウェーデンの公共放送とマスメディアの役割」

Ander Ask スウェーデン国営放送国際ラジオレポーター

スウェーデン研究講座 第168回 2014年11月14日

「スウェーデンの少子化～家族政策と人口学から見たスウェーデン」

谷沢 秀夫 早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員

スウェーデン研究講座 第169回 2014年12月18日

「スウェーデン現代詩人——ハリー・マーティンソンの世界」

解説と講演：児玉 千晶 翻訳家

朗読：毛利 まこ、溝口 園枝、和田 ゆいま

スウェーデン研究講座 第 167 回 2014 年 10 月 22 日

「スウェーデンの公共放送とマスメディアの役割」

Ander Ask スウェーデン国営放送国際ラジオレポーター

(通訳は中川弘子さん)

アンデシュ・アスクと申します。本日はスウェーデンのメディアの自由について幅広く話をするように言われて来ています。とりわけ、私が 25 年以上仕事に携わってきた、公共サービスとしてのラジオ放送についてお話をしたいと思います。また、話の始まりではありますが、これからお話する事は多くは私自身の意見であって、例えばスウェーデリッシュラジオを代表する私の上司のような立場の他のスウェーデン人と意見がまったく同じというわけでも無い事をここで強調しておきたいと思います。



この重要な問題について、スピーチの機会を与えてくださったスウェーデン研究所の須永さんやスウェーデン大使館にお礼を申し上げます。なぜなら私にと

って自由な報道、とりわけ自由な公共放送というものはとても重要で、それは私がジャーナリストとして働いているからのみならず、それが民主主義社会の重要な部分であると信じているからです。とりわけ、センセーショナルであるとか、ユニークだと言う物の見方ではないと思いますが、民主主義や言論の自由とか表現の自由が今日急速に変わっていく世界の中で、さまざまな脅威にさらされていると感じていますので、この事は強調しすぎるという事はないと思っています。ですから時々私は、PR部門のマーケティング担当者の様な手前味噌な話になってしまうかもしれませんが、それと同時にスウェーデンやその他の国々のメディア、出版、公共放送サービスが直面している問題や話題についてもお話ししていこうと思います。

もう既に皆さんお気付きの事と思いますが、私の日本語の知識が限られているので、通訳付きの英語をプレゼンさせていただきます。また少し私は緊張しています。何年もラジオで何百万人のスウェーデン人リスナーに向けて生放送で話をしてきた立場ではありますが、私は私の同僚たちの多くはこの様に聴衆の皆さんの前に立つ事よりもスタジオでマイクで話しかけてる方が簡単に思えるようです。なので、この緊張感から私が何か間違ってしまったらもお許し頂けるとありがたいです。私のバックグラウンドについてももう少し詳しくお話しします。

25年間、スウェーデッシュラジオで働いています、インターナショナル国際特派員として2000年から、またニューヨークの特派員として2011年から、また一時的な特派員としてアジアにもたくさん行きましたし、現在は南韓国、日本にもよく来ています。前回の来日は、いわきや福島地域に行って、原発事故によって自分の子供の健康を心配しているお母さんに会って、取材することが私の仕事の一つになっています。当時はまだゴーストタウン状態であった福島県富岡町にも行きました。全ての事についてそうですが、実際に生身の人間に会って、その惨状を目の当たりにすると言う事はただ、物事について話をしたり、聴いたり、TVで見たりするだけとは違った体験でした。そしてもちろん私の任務はこれらの印象をスウェーディッシュラジオのリスナー達に伝えることで、これは成功する事もあり、成功しない事もある—という事です。

これから、お見せするのは、私が昨年日本を訪問後、ラジオの為に作成したレポートの1つからとても短い音声クリップをお聞かせします。そしてその時のお母さんとの会見とか、ちょっと一部スウェーデンの言語でしゃべっていますが... (画面にはレポートの実写風景。当時の避難生活についてのインタビュー)

この様に日本語、スウェーデン語に訳したりとか、ラジオの番組をこういう風に作っている例です。

これとても感動的な体験であって、また非常に辛い体験ではありましたが、しかし家族の為、そして子供の為に生活を立て直そうと力を合わせて奮闘しているこれらの女性たちから話を聞くという事は、私にとっても元気付けられるとも感じました。今回もまた何人かのお母さんに会おうと思っています。

原発事故は、スウェーデンで大きく当時は報道されており、スウェーデン自身が持つ原子力発電所の安全性についての新たな議論のきっかけにもなりました。その話題はしかしながら、先月のスウェーデンの国選の前に行われた政治討論の一部にはなりましたが、正直な所、あまり大きくは取り上げられませんでした。

公共放送サービスとラジオの話題に戻りましょう。公共放送サービスとしてメディアの概念は定義する事は簡単ではありません。国によってその定義は少しずつ違います。歴史的に見ると、まず英国で始まり、そのBBCがスウェーデンのラジオやテレビのモデルの様なものになりました。

スウェーディッシュラジオは、1920年代に放送を開始し、テレビは50年代になってから始まりました。他の民主主義国家に比べて、スウェーデンでは商業的な民放ラジオやテレビが始まったのはとても遅かったので、公共放送サービスがラジオを独占する様な状態で、90年代に入るまで、テレビ市場もそういった公共放送が独占状態でした。

要するにスウェーデンの公共放送サービスの会社は、三部門からなっていて、それは、ラジオ、テレビ、そしてもう1つは教育ラジオと言う名前のものでありますが、教育ラジオは名前が教育ラジオですが、ラジオ番組とテレビ番組の

両方を作成しています。われわれはふつう6年ごとに国会より更新される放送許可証を持っており、それはわれわれが何を成すべきで、何をしてはならないのかと言った責任事項がそこに書き留められているのですが、非常に重要な事は、国会で新たに決められる予算額です。

この政府からの許可証はラジオテレビ法に基づいており、業務の最も中核となる部分を含んでいます。すなわち報道は、公平でなくてはならず、先入観にとられず、客観的でなければならないという事です。これはスウェーデンでは常に話題の的になっている事で、後でこの事についてお話しします。

もう1つの前提は、われわれの報道が、法律からの一部抜き書きにしますと、民主主義政治の基盤となる精神によって特徴付けられるべきであると言う事です。よくある間違いは、皆さんはわれわれの組織が国によって運営されている会社だと思ってしまう事なのですが、政府との契約によって、コントロールされていて、もちろん政治家によって予算が決定されているのですが、CEO(最高責任者)は政府によって任命されたりはされていますが、それでも、正式には基金によって設立された株式会社です。

目下のところ、3つの会社から成っており、年度予算として約67億スウェーデンクローネ、すなわち私が計算すると1000億円で運営されています。その中で、ラジオの予算は、20億スウェーデンクローネちょっとあります。

そしてこれは国民の間でよく議論になっているのが「額」で、それは国民からの受信料によって賄われています。テレビを所有していれば、毎年2千スウェーデンクローネ(邦貨で約3万円)をスウェーデン人なら払わなければなりません。ある裁判ケースの中でとても重要な話題がありました。その判決によると、もし、コンピューターを所有していて、そのコンピューターでテレビを見るのであれば、受信料は支払う必要がないとされました。このことは予算で経営を図るわれわれの会社にとっては、おそらく将来的に厳しい結果を招くものと思われます。そしてこの判決によって将来にわたってどれほどの影響が出てくるのかは正直なところまだ分かりませんが・・・。みんな受信料を払ってい

ただかないといけません。そうしないと、私の毎月の給料は支払われないということになるので・・・(笑い)。

スウェーデンや世界の各地にある様々なラジオ局やオフィスで、ラジオの仕事に従事している社員数は1,600人を少し超える人数です。公共放送は通常、営利目的ではありませんが、幾つかの例外がある。例えば、スウェーデンテレビはオリンピックやワールドカップのような大きなスポーツイベントにスポンサーをつけることがあります。それからスウェーデンメディアの一般的な状況についてもっと説明していきたいと思いますが、主にフォーカスはスウェーデン国営ラジオ放送とそこでのわれわれの任務に焦点を絞ってお話したいと思います。冒頭でお話しましたように、初めに少しPRの部署の回し者のようなお話になってしまいますが、なにぶんにも私はラジオ局でやっている業務について誇りを持っているので、ご了承ください。

スウェーデンラジオは民主主義社会の重要な一部である。これはわれわれが目指しているものであり、その殆んどが、これに従って行なわれていると思います。自由なメディアと表現の自由というコンセプトはスウェーデン社会に深く根ざしているものだと言えましょう。表現の自由に関する現在施行されている法律はたったの20年前に制定されたものですが、新聞報道の自由に関するものは既に1766年に遡る古い歴史があります。そして1830年という年は重要な位置づけの年でと言われるのです。この年はアフトブラゼット紙が創刊され、同紙がスウェーデンの一大メディアとして、初めて権力の座にある人を追及したり、批判したりします。同紙は現在もスウェーデン最大の発行部数です。現在はゴシップ、エンターティメントのニュース、スポーツ、世界中の奇妙なニュース、これに政治ニュースと解説を取り混ぜたタブロイド版で発行されています。

スウェーデン社会はとてもオープンで、殆んど国民から高く評価されている。例えば、官公庁書類は一般公開の原則がなされ、メディアで働く者は官公庁とか政治家が取り扱った殆んど書類を読むことができます。例外として個人的な問題とか国家の機密事項の場合を除かれますが・・・。また、従業員が勤

めている会社で規則違反があればそれを告発する自由が認められており、それに誰がそれをしたのかと、雇用主が追及することは禁止されています。新聞報道と表現の自由についてはもちろんメディアに働く私たちに一定の制限を設けています。例えば、誹謗、中傷すれば法律によって罰せられますし、人権を侮辱するような行為も犯罪ですし、先の国家機密の漏えいもこれに含まれています。

報道の自由と言論の自由のための基本法は目下のところ、法的な見地から議論になっています。それは何かというと、新しいメディアであるインターネット上で起きていることの責任所在で、これは一体誰にあるのかということです。新聞やラジオも放送内容に対してその法的責任の所在は編集長にあるのですが、編集長にあるのと同様に、責任をインターネットに追及できるのかということです。しかし、インターネット上のサイトではその多くは無記名で行われているものなので、これは簡単には解決できない問題になっています。この秋、政治家と法律の専門家によって高度なレベルの委員会がこの問題に着手し、提案することになっています。

スウェーデンラジオのコンセプトは自立、信頼、時流に遅れないことなどですが、これらがあたかも当然のようには見えます。しかし、これは必ずしも簡単なことではなくて、われわれがいつも目標にしていることです。それは独立した立場からコメントを発するということです。先ほど申し上げましたように、企業の運営資金に関しては政治家の手の内にあるのですから、政治に関して本気で調査したり、批判をしたりするのを恐れているのではないかと疑われるかもしれません。しかし、それは私の長い経験から言えるのはそうではないと言うことです。

最近あった例から申し上げますと、防衛省の大臣が辞職した例があります。それはサウジアラビアの政権と取引を行い、彼らの軍需工場の建設を助けたという話を私の同僚が暴露したというニュースです。そしてその大臣が核心に関わっていなかったと否認したにも関わらず、個人的な理由と言うことで辞任に追いやられたてしまったのです。しかし、この例に限らず、事実追及に至るまで

は、われわれが調査と対象となる人々と接触を試みる時に、彼らは何らかの方法を使ってわれわれが仕事をし難くなるようにしてくるのは事実であって、それは後でお話します。そしてもちろん、われわれが政治家やほかの権力者に対して寛容しすぎると思っているスウェーデン人はどこにもいます。これはバランスの問題でしょう。しかしスウェーデンの人たちはわれわれの言うことに耳を傾けてニュースを聴いてくれます。われわれは唯一、国全体をカバーするラジオ局ですし、またそうあり続けなければならないのです。スウェーデン人口約960万人のうち、毎日500万人のリスナーがラジオを聴いてくれているのですから。もっともこの数字はチャンネルを換えたら二回とカウントするリスナーもいるなど数え方の誤差もある不確かな数字かもしれませんが・・・。

チャートですが、チャンネルが四つあり、P1は殆んどはおしゃべりトークで、時事問題についての番組もある。P2はクラシック音楽とトップチャートに載っていない音楽を流し、それと少数派言語の放送、P3は若者向けのチャンネルで、音楽と時事問題を扱う。P4はリスナーの数からみると最大チャンネルで、エンターティメントから音楽、これに地元ニュースからなる広い展望を持ったチャンネルです。

ところで、スウェーデンのジャーナリズムの信頼度ですが、一般的に信頼されているというわけではなく、最近の調査によると、その信頼を失いつつあるという結果が出ています。その中であってわが社は国内で最も信用ある会社として位置づけられ、ボルボやイケアより上にランクされています。もっともラジオ局が自動車メーカーや家具販売会社とどうやって比較しているのか、正直なところ、この調査そのものがどのようにして行われたのかはよくは知りません。ただ、これは独立したメディア企業が、ある大学と共同してまとめ上げた結果です。いずれにせよ、人々が私たちの報道に信頼を寄せているというデータなのでとてもうれしくは思っています。また、このことは他のヨーロッパの公共サービス企業と比べてみても私たちの局が高くランクづけられているのです。何故か。理由を見つけるのは簡単なことではありませんが、信頼とよき報

道の在り方、また、これまでスキャンダルとかの問題がなかったこともあげられるでしょう。

さて、新聞をはじめ、ラジオ局、テレビ局はどうやって商業的に利益を出すのかを考えなければいけません。われわれの局はその必要は全くありません。殆どどの新聞はその社説の中に明らかに政治的意図が感じられますが、私たちはそれをしてはなりません。公共放送のラジオレポーターとしては、われわれは何をしてよいか、言っただけでいいかとはとても厳しい社内規定があり、あからさまに一つの政党を支持するということは許されません。例えば、局職員が一時的に排除されるということがありました。それは彼がある政党とか、ある候補者に賛成とか反対とかの政治的立場をあからさまにとってしまったからです。ちょっと自慢させていただきます。わが局はこれまで数多くの賞や報道関係部門の賞をいただいています。とりわけ、この2年間は調査報道と通信は成功を収め、世界中から名声を博しています。そして、この活動を続けるように多くのスウェーデン国民から支持を受けています。しかし、表面的には多くのことがうまくいくように思えても、われわれは今やっていることをそのままの形で続けていくということはいけません。

ではなぜ変革が必要なのか。メディアの様相は着実に変化していて、しかも早い速度で進行中です。われわれのような年配者には時々、全ての新しいものについていくのが大変だと思われることがあります。迅速に仕事をしなければならなくなりましたし、短い話をまとめてニュースやストーリーを流すのはラジオを通してだけではありません。現在ではラジオを聴くばかりでなく、多くの方は携帯電話やコンピューターでわれわれのニュースを聴くようになっています。また、リスナーは何世代にわたって慣れ親しんできたような1日に決まった時間の放送を聴くというのではなくて自分の暇のある時に聴きたい——といったものです。この結果、われわれはそれに対応してとても迅速でなくてはならなくなりました。このことは事実の変革にとどまりませんし、報道の仕事の多くの部分にも影響を与えています。われわれは以前のように信頼を受ける報道をし続け、この速度についていけるのでしょうか。このスピードがもしか

て事実確認を怠るような間違いに繋がらないのか、質問をすべき正しい相手に質問が出来ていないのではないだろうか。仕事の反省や同僚とのディスカッション時間もどんどん短くなってきています。このことが信頼される報道に何を意味するのかということが、大きな議論となっています。こうした事態はほかの国のジャーナリズムでも同じ現象がみられていると思います。

そして、こうした一連の技術の発展がよいのか、悪いのか、またどのように使われるべきなのかについてですが、とにかく、今のスウェーデンの若者の多くはラジオもテレビも持っていません。彼らはスマホとコンピューターを使ってニュースとかその他の必要な情報を見つけるのです。ですから、公共放送会社の立場からすると、ラジオ部門はこういうところで競争しなければいけませんからその面に力を入れていきます。反面、よき、信頼される報道も堅持しなければなりません。つまり、技術的な発展はあっても基盤は同じなのです。

スウェーデン社会は円熟した社会環境にあると思われるかもしれませんが、先ほどから再三申し上げているように、変化しますし、また変化しなければならぬ。その一つは移民問題。毎年、大勢の移民を受け入れた結果、新しい文化、言語、宗教などが社会にミックスし、存在します。それを受けて公共放送の立場からですと、その変化を報道する事であり、日常生活の中にこれらの新しいスウェーデン人を受け入れることです。そしてわれわれの放送を彼らに届け、このラジオ報道が彼らの生活の一部であるということを感じて欲しいのです。

そして最も重要なことは、彼らがスウェーデンの民主主義社会の一部になっていくことなのです。新スウェーデン人の移民の方々の中には民主主義国からやってきた人もおり、その人たちはたやすくこのスウェーデンの民主主義の領域に統合されていきますが、多くは独裁政権やメディアが検閲されたりするなど言論の自由がない国々からやってきた人々です。このことはわれわれにとっては難題です。それをどうやって成功を図るのかということは難しいのですが、この10年間をみますと、こうした人たちを局採用するなどして展望を広げています。

地方での存在感は、これも重要で、議論されている事です。何年も前に、国連のメディアはストックに注目しすぎて地方は忘れられていると言う風に責められている事がよくありました。とりわけ、市街地のはずれにある田舎の地方の事です。われわれはローカルな局を持っています。それは、政府との合意の一部として成されている事です。スウェーデンの中の新聞各社が、経済的に生き残りをかけて奮闘している時に、これらのラジオ局はさらに重要性を増してきています。全国紙のレベルを見ても、地方紙のレベルで見ても、多くの新聞が部数を減らしたりして、廃部に追い込まれていたりします。中にはそれがラジオにとって良い事だ、競争がなくなるじゃないか、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが私はそうは思いません。真面目に報道しているメディアが、それが地方紙のレベルであっても、民主主義国には必要なのです。

公共サービスとしてのラジオとテレビは民間の新聞社から、われわれはウェブサイトでしている部門で批判を受けてきました。ホームページやエッセイストを通じて、インターネットでニュースを流し、新聞各社は不当な競争だと言います。彼らは資金を得る為に、広告集めに頼らなくては行けないのですが、われわれのラジオはそんな事を考えずに報道できる。なぜならわれわれの仕事は受信料で賄われているからです。新聞各社にしてみれば、ネットでのわれわれの報道はラジオとテレビを作成すると言う基本的な公共サービスの任務からは外れていると言うわけで、われわれがそれをやめるか、少なくとも縮小するという事を望んでいます。今後それがどうなっていくか見守りましょう。

スウェーデンはジャーナリズムにおける危機が今存在しています。新聞各社は、短期間の間に多くの読者を失い、広告収入も減って、多くの場合、業務再建に追い込まれました。そして実に多くの新聞記者が、職を失いつつあります。中堅の新聞社は生き残りをかけて、協力しあったり、大きい新聞社が小さいものを買収したりしています。そうでなければ大量の人が失職に追いやられます。中には紙上での競争をやめてインターネットの報道だけに絞って生き残りをかけて頑張っていこうという会社もあります。スウェーデンには、新聞業

界への補助金制度があって、年額 5 億 5000 万スウェーデンクローネが政府から支払われています。

これは新聞社が、廃部しないように済むために助ける為の制度ですが、さまざまな新聞作りを色々な種類の新聞が存在するというのを推進する為のもので

す。

批評家や評論家達は、こんな額では足りないと言っていますし、もちろんこの補助金で全ての経済的な困難に陥った新聞社を救う事などできません。また、新聞記者達の労働組合は、新聞社の経営改善の為に新聞業界への是正を求めています。中にはこの問題が、誇張されていると言う人もいて、まあ若い世代には情報やニュース、その他の供給源を見つけるのに夢中なんですけど、私はそれが時には心配の種に思えます。われわれの手にする情報、いわゆるニュースの後ろには一体誰が控えているのか、また、常に確証というものがあるのでしょうか。ウクライナの危機は、現在におけるそういった国際的な一例です。西側のメディアの報道と、ロシア人がフリーメディアと呼ぶところの、ロシア人が得る報道を比べてみて下さい。民主主義国の、一市民としてももちろん自分の読むもの、聞くもの、見るものには批判の目を向ける事。そして、私の個人的な意見では、それはさらに重要になっていると思います。われわれは、オーディエンスを待っているのではなく、オーディエンスの方にわれわれが行って、動かさなくてははいけない。リスナーとのコンタクトは限られたものですけど、今日はそうではありません。

私の同僚が取材を巡って威嚇を受けたという例があります。そして政治家もメディアとかそういった新聞記者の業務に影響を与えることがあります。しかし、スウェーデンの国会はスウェーデンラジオを愛しています。そして今まで政治家の方から公共放送の為にサポートをしてきてくれました。彼らは、われわれからの追及が好きではありませんけれど、それでも協力を惜しまないでしてくれてきました。われわれは左翼すぎると批判を受けていますが、ジャーナリストは政治的な意見を仕事の方に持ち込まないプロフェッショナルだと思います。

さて、われわれの未来の道は如何なのか。それは不確かであり、また変化が必要かどうか。この事を少なくとも今調査しているところです。また、資金面についてですが、受信料は税収の中から賄われるようになるでしょう。税金に頼っている形は、政治家の影響がもっと強くなってしまふ恐れがあるのではとの声もありますが、現在はそういう影響はあまりないのです。もっとも、先月の選挙以来、我々の公共放送の未来について不確かな状況になっています。と言うのは、社会民主党と緑の党の少数派の連立政権は他の政党から支援を受けないと、多数派になりません。そこをどんなことになるのかと懸念しています。来年にまた選挙になる可能性もあるのではないかと懸念しています。

また、政治家がわれわれの仕事を邪魔する事例をあげましょう。政治家が直接プレッシャーをかけてきて仕事を邪魔するという事があるのではないのかと言う風に聞かれるのですが、それはめったに起こる事ではありません。しかし彼らが色んな邪魔をしてくると言う事はあります。政治家とか他の権力者達は、例えば会社ですとか大きな組織ですけど、彼らが最近とてもジャーナリストとかメディアを扱う事に長けてきています。彼らは、メディアトレーニングのコースを受けており、例えばどうやってインタビューを受けていいのかとか、どういう風にはぐらかしていいのか、電話に答えないとかです。

また、プロフェッショナルなスタッフを雇ったりとか、PR 会社に外部委託したり、また、議題を変えるように言って来たりとか色々します。このように彼らがそうやって構えてくることでわれわれはもっとプロフェッショナルな対応をしなければならなくなってきました。

こんな事例があります。以前の話ですが、二人の同僚がサウジアラビアで政府がサウジアラビア政府と組んで軍需工場をサポートしていた事件について追及した事があります。その為、一人の防衛庁の大臣が辞任したと言う例をお話ししますが、その二人のジャーナリストはいきさつの事を本に書いたのです。これは8月に出版されたのですが、その担当大臣とその他の防衛に関する他の役所とか、そして他、新聞記者の対応の絡みなどがあり、私の同僚はこれらにどうしたか的一幕が書かれています。このように、われわれに対する政治

的なプレッシャーは煩雑出てくるとは思いませんが、何年か先の事はわからないにしても、政治の真意がどこにあるのか問われることになります。こうした問題や、政治的圧力という物は日本でもあると言う事を議論されているという事を知っています。

しかし、スウェーデンはとてもオープンな国で、私は他の外国で働いてきましたけど、権力者からコメントを得ると言う事は不可能でした。この点、スウェーデンでは公営ラジオ放送局としてインタビューとかコメントを総理大臣とか、他の政府高官から求めた場合、そんな長い間待たせないで得ることが出来ます。

私が、ポジティブな気持ちの日には、スウェーデンの公共放送はとても力を持っていていいなと思います。また大多数のリスナーはわれわれがしてきたこれまでの仕事に評価をしてくれていると思います。スウェーデンの人々はわれわれの、海外からの報道を受けて世界の事柄を視野に入れて良識と行動を合わせて懸命な民主的な判断が下せるようにする事が重要だと考えている、そういった会社で働いてきた。

今後、財政的にどの様な予算が組まれてくるのかは、読めないでニュース部では業務の縮小を迫られています。そしてそれが意味するのは良質のニュース、重要なニュースについて本物の仕事をして全ての事実をチェックするだけの時間と人材が縮小されてしまうと言う事です。そして他の大きな競争相手も各社も縮小している状況だから、人々が受ける情報量は減ってしまうのではないかと心配です。ジャーナリズムの役割を大げさに言っていると思う人もいるかもしれませんが、他の仕事と同様にプロフェッショナリズムと知識が重要です。ゴシップに根差したものや、事実の確認を怠ったり、資質の悪いジャーナリズムが横行しているのはわかっています。けれどもスウェーデンの人々が、これらを目にした上で、質の高いジャーナリズムをもっと評価し、ありがたく思ってくれればいいなと思っています。

しかし、ニュースをいち早く報道したいと言う競争が激化する事でミスを犯す様になると、リスナーの信頼が失われると言う事を懸念しています。そして

人々は自分の意見の正しさを確認できるメディアだけに流れてしまい、それを見たり聞いたりと言う事になります。それと同時に公共サービスはとりわけ若い視聴者に声を届けようと頑張っていますが、どんな未来が待っているのでしょうか。

そして、その事がわれわれの民主主義社会に何を意味するのでしょうか。答えはわかりません。しかし希望は持っています。そして、しばらくの間は少なくとも自分の出来ることをやって行くだけです。そしてわれわれの体には、公共サービスというのが染みついています。これはちょっときどつたと感じられるかと思いますが、むしろ毎日私は民主主義の為にしているんだと考えて暮らしているわけではありませんが、この責任を真面目に受け止めていますし、変化の速い世界で私が受けた話題や問題がたくさん山積みの中で、何でも民主主義的なものが何でも当たり前に与えられてると思っではいけないのです。そして人々が自分自身で判断し、出来るように伝えていく事こそが民主主義の性格であって、大切なことです。私はジャーナリストになっていなければ教師になっていたと確信していますが、国際ニュースレポーターとして働く事で世界の色々な事を伝える事が出来、やりがいと幸せを感じています。

スウェーデン研究講座 第168回 2014年11月14日

「スウェーデンの少子化～家族政策と人口学から見たスウェーデン」

谷沢 秀夫 早稲田大学人間総合研究センター招聘研究員



皆さん今晚は。今日は、金曜日のこの時間に、これだけの皆さんに集まっていた
ただき感謝します。僕は、71歳です。50年もスウェーデンに住んでいたとい
う事で、皆さん、変なおじさんと、半信半疑の方は、たくさんいるんじゃない
かと思います。先に言っておきますけど、僕は、別に学者でもないし、深い研
究者でもありません。ただ、僕の50年の生活を通して、今日、お話しするの

は、一番、カルチャーショックを受けたことに関連したことから始まっている内容のものです。

自己紹介しますと、スウェーデン、ヨーロッパに行こうと思ったのは、1966年。大学の勉強を終わって、すぐの頃です。当時、日本が、海外に旅行してもいいと時代になってから、多分2, 3年経ち、その頃、若い人は、ヨーロッパに行って、勉強なり、色々見たいという人が増え、僕も、イギリスに行って、英語を勉強しようというのが始まりです。

最初、ロシアに行きました。たくさんの方は、車でいったんですが、僕は、早くヨーロッパに行きたいと思ったので、飛行機でモスクワに行きました。ここから南と北に行く人が分かれたんですが、僕は、モスクワに少しいて、フィンランド経由で、スウェーデンに入りました。それが、1966年6月でした。とてもきれいで、僕が育った札幌とよく似た景色でした。ユースホステルに泊まったんですが、その間に、スペイン人とか、いろんな国からの若い人たちがいっぱいいて、みんなアルバイトに来ていたんですね。ここでは、労働許可もないし、企業は、すでに、4週間の夏休みがあるので、アルバイトがある。それで、探した結果、ビール会社の空瓶選別。すぐに仕事が見つかり、給料もよかった。税金も払う必要がなかった。僕の父親は、国家公務員だったんですけど、父の給料よりも良かった。ただ、物価が高かった。そんなことで、2か月か3か月居ようと思ったんですが、住んでいるうちに、スウェーデンの事が、少しずつ分かってきた。

一番びっくりしたことは、勉強する事は、タダだったこと。スウェーデン語も、外国人の学生には、タダで教えてくれる。僕の行ったところは、ストックホルム大学の付属みたいところで、そこで、スウェーデン語を勉強すれば、学部に行けるという事で、2, 3か月やってみようかと思ってやったんですが、2, 3か月では何の勉強にもならない。結局、2年近くいました。

その後、目標だったオクスフォードに行きました。残念ながら、オクスフォード大学ではなく、オクスフォードの英語学校。でも、非常に高いお金のかかる英語学校で、ここにいる殆んどの人達は、ヨーロッパやアジアから来た金持ち

の息子や娘。寮生活で、夜は、男性も9時には門限。寮では、イタリアとかスイスから来た男の子は、ポーカーをやって、僕もそれに参加して、ひと儲けしようと思ったんですが、日本への帰りの切符代もつぎ込む状態だった。金がなければ、スウェーデンに戻ってアルバイトすればいいと思い、スウェーデン行きの切符だけを買っていたため深刻ではなかった。ところが、最後のお別れパーティーの時に別れポーカーをやって、不思議なことに、それまで損した分はみんな取り返した。

それで、スウェーデンに行ってもアルバイトをする必要がなくて、半年は、生きられる。今で、計算すると、100万ぐらい稼いだ。スウェーデンの大学に入ったんですが、試験に全く合格しない。その当時、毎月、一回試験がある。その試験に合格しないと次の奨学資金が出ない。ところが、うまい具合に神様がいて、ある女性と出くわし、その女性が真剣に僕の勉強を助けてくれた。今でも、助けてもらっています。そういうわけで、スウェーデンで勉強を始め、薄い眼鏡が、コカ・コーラの瓶底の様な眼鏡をかけるくらい勉強しました。一番誇りに思うのは、僕は、経済学を勉強して、その時に、フナビザ先生の最期の授業を受けたことです。

その間、いろいろなアルバイトをしました。日本人がたくさん来るようになっていたので、ガイドをやったり、日本航空の仕事だとか、日本関係の仕事ももらったり、夜は、日本語の成人教室を三つもちました。子供が出来た後は、夕方から10時まで、郵便局の手紙の分類のアルバイトをしました。作家志望や作詞家もアルバイトをしていて、その時が一番楽しかったです。

学校も終わって、2年くらいたった時、自分で会社をやろうというので、スウェーデンで、キティの代理店を初めてやったんですが、キティちゃんは、可愛いのですが、輸入だとか、消しゴムだとか、非常に面倒くさい製品とか、体を壊すくらいになったので、それを辞めて、他の仕事をやり始めました。小さな商社みたいなもので、日本の製品をスウェーデンに紹介したり、逆にスウェーデンの製品を日本に紹介するようなことですね。

一番大きく、真剣にやったのは、子供の遊具です。この形の遊具が始まったのは、スウェーデンでして、イケヤの家具と同じような感じで現場で物を造るという事で、みんな今は、コピーされて、世界中でやってますけど、この分野では、スウェーデンでは、このハルサと言う会社がトップです。

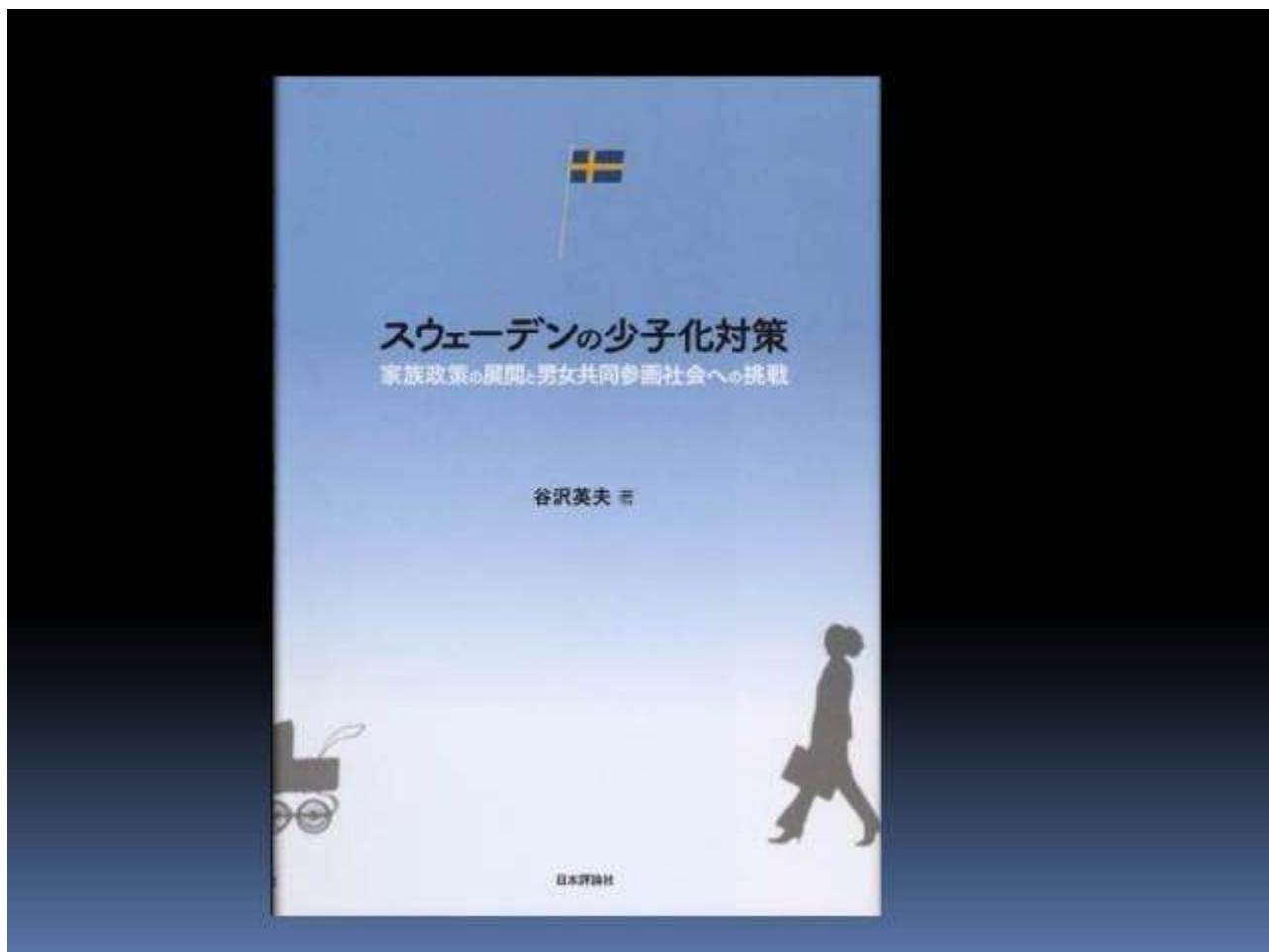
僕も、去年、ここから仕事を辞めています。今、100名位、日本で働いていますが、ようやく、このくらいの事務所を持てるようになり、昨年、仕事をバトタッチしました。時々行ってますけど。こんなわけで、ほとんど、あまり好きではなかったビジネスをやってきたんですね。

その他に何をしたかと言うと、強いてあげれば、日本人会と言う小さな会があるんですが、400世帯、会員数は、約800か900人、結婚したら旦那さんも会員になる。そうしないと、市から、補助金が出ない。年間100万円くらい。60歳近くなった時に、もう、ビジネスはいい。このまま、死んでいくのもつまらない。勉強しよう。いろいろ日本から質問されて、それを上手に答えるのには、少し、日本で勉強してもいいじゃないか。今の老人、平均80歳以上生きるから、まだ時間がある。

という事で、大学院に応募したところ、運よく入学できた。この先生は、元、人口問題研究所の阿藤先生。人口学では非常に優れた方です。大学院生は、僕と中国からの留学生の2人です。非常に細かいところまで指導してもらいました。それと同時に、慶応大学の金子勝先生に大学ゼミに土曜日、2年間ほど行っていました。「勉強しに来てもいいよ」という事で、一番人生の中で、勉強した時期じゃないかと思えます。親が生きていたら、すごく喜んでいたと思います。

そんなわけで、それをまとめたのが、「スウェーデンの少子化対策」。それから、今年出ましたツマビリの子供のケアのスウェーデン的なやりかたの本を訳

したところでは。



そんなことをやっているうちに71歳になったところです。50年、スピードを上げて、ここまで来ました。現在は、結構好きな事をやっています。それから、今、早稲田大学の研究員。3年だけですよと言われたのですが、今、4年目で、延長されそうです。

今日のテーマの方に入っていきます。「少子化問題」と言うんですけど、本当は、少子化という言葉はスウェーデンにはないです。これは、多分、日本人が作ったものではないでしょうか。

(編集部・パワーポイントによる説明が始まる)

少子化と家族政策 人口学から見たスウェーデン





スウェーデン王国

人口 940万人

面積45万Km²

民主主義実験国

技術工業国

IKEA H&M
VOLVO Skype

福祉制度

このパワーポイントは、学生向けに作ったものですから、初歩的なことが、結構書いてあって……。スウェーデンと言うのは、どこにあり、どういう国だという事は、皆さん、知ってますよ、ね。人口940万と書いてありますが、今は、960万人を超えている。あと2年で、1000万人になります。多分、1000万人になったら、EUの中でも、もう少し、力を持つようになるんじゃないかと思います。スウェーデンを代表するものは、こういうものです。

もう一つ、僕が一番ショックを受けたものは、女性の地位です。

Swedish Women's Empowerment



Justitminister Beatrice Ask redovisar
sitt stora engagemang för kvinnorna.

Carin Gillblad, Eva Axelsson, Malin Andersson och Therese Mattsson ingår i den
engagemang som Beatrice Ask har tillväxt för att bekämpa grov organiserad brottslighet.

女性50%占める職業

- 大臣
- 国会議員
- 自治体議員
- 公共機関
- 教師

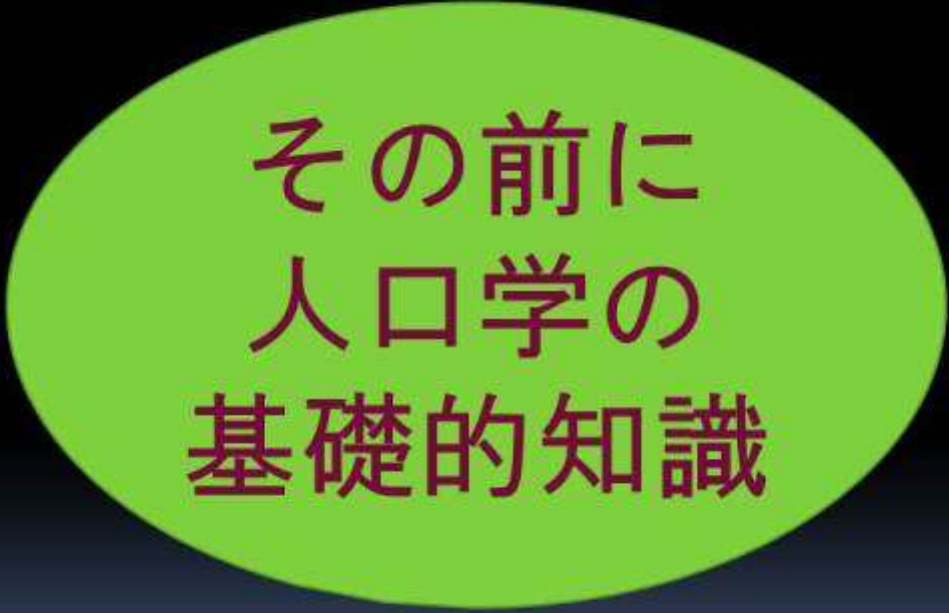
(上場会社役員20%)

僕の姉は、2人とも、学校の先生。共働きで大変忙しく、子守を雇っていた。姉が忙しくても、姉の夫たちは新聞を読んでいたりして、家事は何もせず、「こいつら、おかしいんじゃないか」と思っていたが、スウェーデンに行ったら、そんなことは全然見えないんですね。1966年で、既に保育園にお父さんが子供を連れていく姿がたくさんあった。これが一番ショックでしたね。

画面の一番上のが、政権が代わったばかりなのですが、法務大臣が女性で、警察署長、裁判官だとか、検事長みたいなのが、女性で押さえている。ちょっと、これは、どこの国を見ても、このようなのはないと思うんですが、女性が、これだけ進出している一つの証拠ですし、シンボルだと思います。とにかく政治とか公共機関、女性の力が、男性と全く五分になる社会になっていると

言うのが非常にショックでした。このことが、これからのスウェーデンを代表する一つのニュースなのではないかと思います。

ちょっと、遠回りしましたが、僕が60歳近くなつた頃から、スウェーデンの少子者問題に絡めて、日本でも「これは大変なことだ」と言っていたんですけど、これが全然一向に良くならなかった。何だろうという事が問題だったんですが、僕は、さっき、紹介した女性の地位とこの出生率が関係あると聞いていましたから、その人口学的な社会科学の手法を使って、男女平等の社会は、絶対これから必要と言うことを証明したかったわけです。そういうわけで、スウェーデンと言う国は、なぜ、こういう女性の地位が上がって、しかも、出生率が高いか。どこの国を見ても、今、女性の進出が強い国、北欧は、別にして、出生率が下がっている。それがスウェーデンでは、安定している。そういう疑問があったわけです。

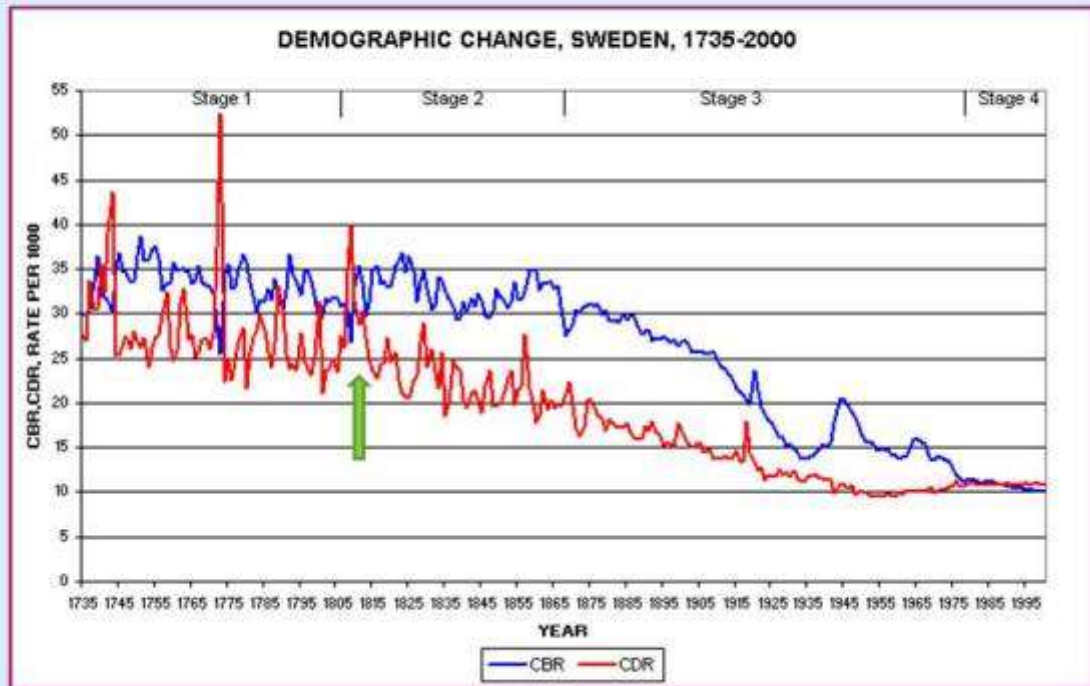


その前に
人口学の
基礎的知識

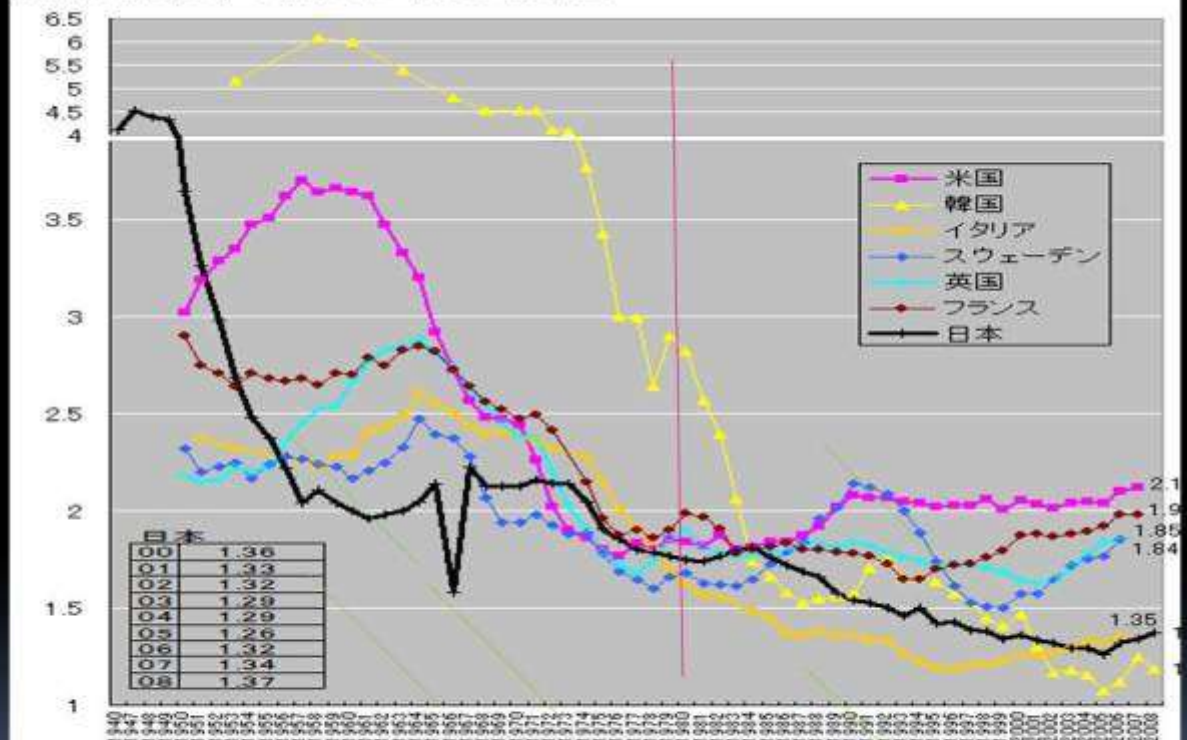
それをわかりやすく説明するには、1800年代の農業社会から見ていかなければ説明は出来ないな、という事で、そこから始まったんです。人口学的な手法で、それを説明して行きたかったわけです。

そういうわけで、基礎的な知識と、このパワーポイント、どちらかというと学生用に作ったものですから、皆さんが知っていることを話すことになりませんが、人口学的な立場から説明していきたいと思います。

人口轉換 (多產多死 ⇒ 少產少死)



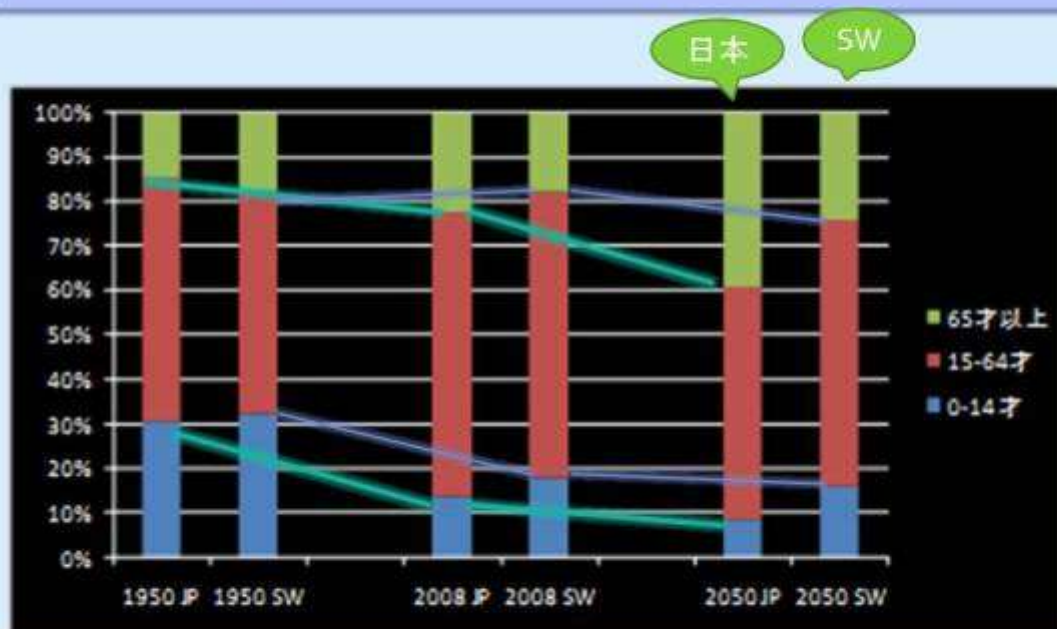
合計特殊出生率の推移(日本及び諸外国)



(注) 合計特殊出生率は女性の年齢別出生率を合計した値。日本08年概数。
 (資料) 厚生労働省「平成13年度人口動態統計特殊報告」「人口動態統計」(日本及び米仏'07
 国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集2009」, Korea National Statistics Off

人口の推移をみると、一番青い線が書いてある左側、多産多死の時代、たくさん子供を産んでおかないと、農業を賄っていくことが出来ない。たくさん産んでも多くの子供が死んでいくという時代。緑の左ですが、最初に、死亡率が、下がっていたが、出生率は、同じテンポでは落ちない。高い率で動いていて、何が起きたかという、いわゆる人口爆発で、急に人口が増えた。農業社会においては、大変な事で、農業の人達は、どうやって生活していくかという大きな問題があったのですが、その前に、先進国は、大体、みんな同じような流れをしているんですね。日本もそうです。先進国の特徴という事。同じような問題が起こったわけです。人口がたくさん増える。この人口の変異は、ところが、近代に入ると、大きな差が出てきたわけです。

日本とスウェーデンの人口構成



スウェーデンと日本の人口の構造の比較ですけど、1950年代から大体同じような人口構成だったんです。が、現代に入ると、スウェーデンは、出生率が高く、日本は、出生率が低く、老人が増え、将来は、こういう風になる。これは、これからの大きな課題となるわけなんですね。そういう訳で、私は、農業時代の人口はどうだったのかという事から入りました。

スウェーデンは、皆さんご存知だと思うんですが、たいへん寒い国で、土地が荒れ、岩場だけの土地があるわけで、農業には、全く適してはいない。南の方には、一部いい所があるんでしょうが、こういう生活が、わずか百数十年前にはあったわけです。

私が最初にやったのは、スウェーデンの人口統計を調べてみようという事で、スウェーデンは、教会が、戸籍の調査をしまして、生まれた時、死んだ時と言うのは、教会の責任でしたから、その人口統計が継続的に残っているのは一

番古いんですね。そこの 1850 年代の統計を見たわけです。これは、なぜやったかという、女性はどうな生活をしてきたかということ裏付ける為です。

貧困の農業社会





右側は、全部男の人だけ。紫は、地主、自分の土地を持っている地主の数。茶色は、小作人だとか、雇われの農民です。あとは、兵隊さんとか、いろんな技術者とかあったわけです。圧倒的に土地がない小作人とか、雇われ農民が多い。次に女性の方をみると、地主の奥さんは、同じ数、みんな地主は、ちゃんと結婚できている。女性の方を見るとこれだけの土地のない農民の人達は、結婚もしていないし、これしかない。後は、未亡人だとか、職業を持っていない。もう一つ、ここに、未婚者と言うのがありますが、この人達は何もしていなかったかという、全くそうじゃなくなくて、ここで働いていた。もっとも、貧乏だったのは、この人達。この人達は、当時、女性の職業と言うのは、全く無視されていた、と言う時代です。未婚者と言う人がなぜ、増えたのかと言うのを見てみると、職業の選択というものがものすごく制限された。

一番女性の中でいい職業が、産婆さん。その次に、小学校の小さい子供だけを教える人。

後は、すべて禁止です。それから、ここに成人権の制限と言うのがありますが、男性は、成人になる年齢が低かったんですが、女性は、26歳。そこまではないと、自分でお金を持ったり、商売は、禁止されていましてから、自分で財産を持つとか、出来ない。教育も全く制限されていましてから、女の子は、今でいう小学校3年か4年、それ以上の教育する権利を持たない。結婚したら、すべてを失う。いわゆる、離婚もできない、仕事もできない、財産も持てない。そういう時代が続く農民時代があったのです。これを見ると、日本の女性とよく似ている立場にあるし、日本より厳しい気がします。

で、この人口爆発が起きた時の1885年、ここで大きなことが起きます。スウェーデンは、この時代からアメリカに行く移民の許可を緩めたんですね。と言うのは、ここで人口爆発がしちゃって、農民、農村にもたくさんの方が要らなくなりました。で、アメリカに吸収、移民していく人が、その当時の人口の25%くらい。人口500万人中、100万人ちょっとの人がアメリカに行っちゃった。これ大変な事だったんですが、なぜかという、アメリカに行く大多数は、働き盛りの男の人が行った。

で、これは、あとから出生率に影響するんですが、それ以上に人口が増えたから、その後の発展に相対的に影響がなかった。なんで、影響がなかったかという、同時に、スウェーデンは、産業革命が起きた。産業革命が起きて、いろんな産業が起き、それを吸収していたのが農民から来た女性です。それが都市化を招き、昔のように農民社会じゃないから、子供を産む必要がなくなった。それで、出生率が落ちていった。

男尊女卑社会
20世紀初頭まで

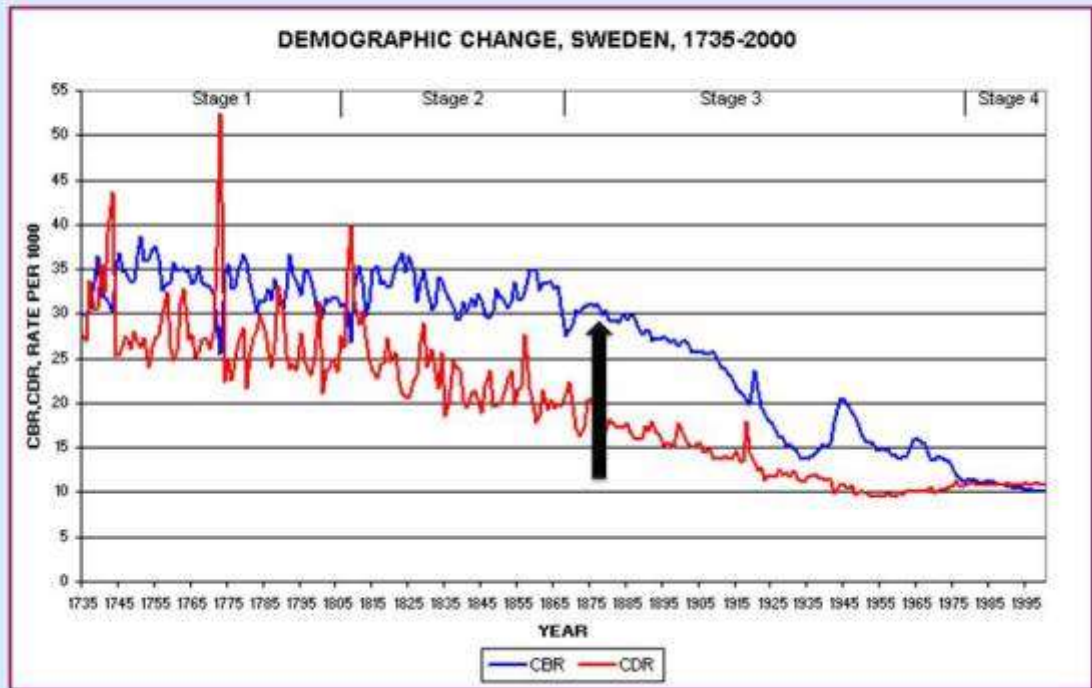
職業選択
制限

教育制限

成人権制限

既婚女性
就労制限

人口轉換 (多產多死 ⇒ 少產少死)

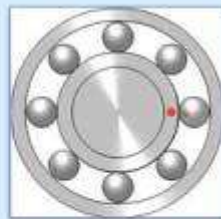


産業革命と
女性役割変化



都市化・低出生

スウェーデンの近代産業化



• 1900年代の転換

- 人口
- 産業(農業→工業)
- 都市化
- 労働者階級
- 女性労働進出
- 政治改革

(発明品ダイナマイト、ジッパー、掃除機、
遠心分離機、...Tetra, Skype, 薬、テンプル)

どこの国でも、産業革命で、工業化が進んだのですが、世界で、もっとも、ハイスピードで、ダイナミックに進んだのが、スウェーデンだと思います。日本の場合は、国の政策、指導で、繊維会社などできましたが、スウェーデンの場合、プライベートな会社が爆発的にできた。その理由は、何かと言うと、ちょうど、その頃、企業することが解禁になり、誰でも、会社を興していい。許可を貰わなければ、企業出来ないという時代があったんですが、そのころ、誰でも会社を興してもいいという事が大きなインパクトを与えたんです。そういう訳で、エリクソンだとか、ベアリング、マッチ工場、もちろんダイナマイト、ジッパー、など、ものすごいスピードで、産業化、工業化が進んだんです。さっきも、言ったように、農村、農民から出てきた人たちが、都市に流れ込んで、特に女性がそうですが、大きな社会問題になる。みんなが職を得たわけで

はなく、大変混乱した時代で、女性の位置は、大変低かったですから、女性、男性もアメリカに行った若い人もいます。

ここに影響しているのですが、(ここにパワーポイント 17 を挿入してください)初めて、出生率が、1.7 レベルに落ちた。その当時の人口置き換え水準は、2.4 くらいありましたから、大変なことになったわけです。それが、1930 年代に最悪の状態になった。それは、1930 年代初めころ、アメリカの恐慌が起きて、失業率がものすごく上がった。そういう訳で、出生率が急激に落ちた。

ミュルダール夫妻の提案



『人口問題の危機』
低出生TFR 1.7：1933~4年



危機

経済力低下、格差社会
国力低下、高齢化社会、



打開策

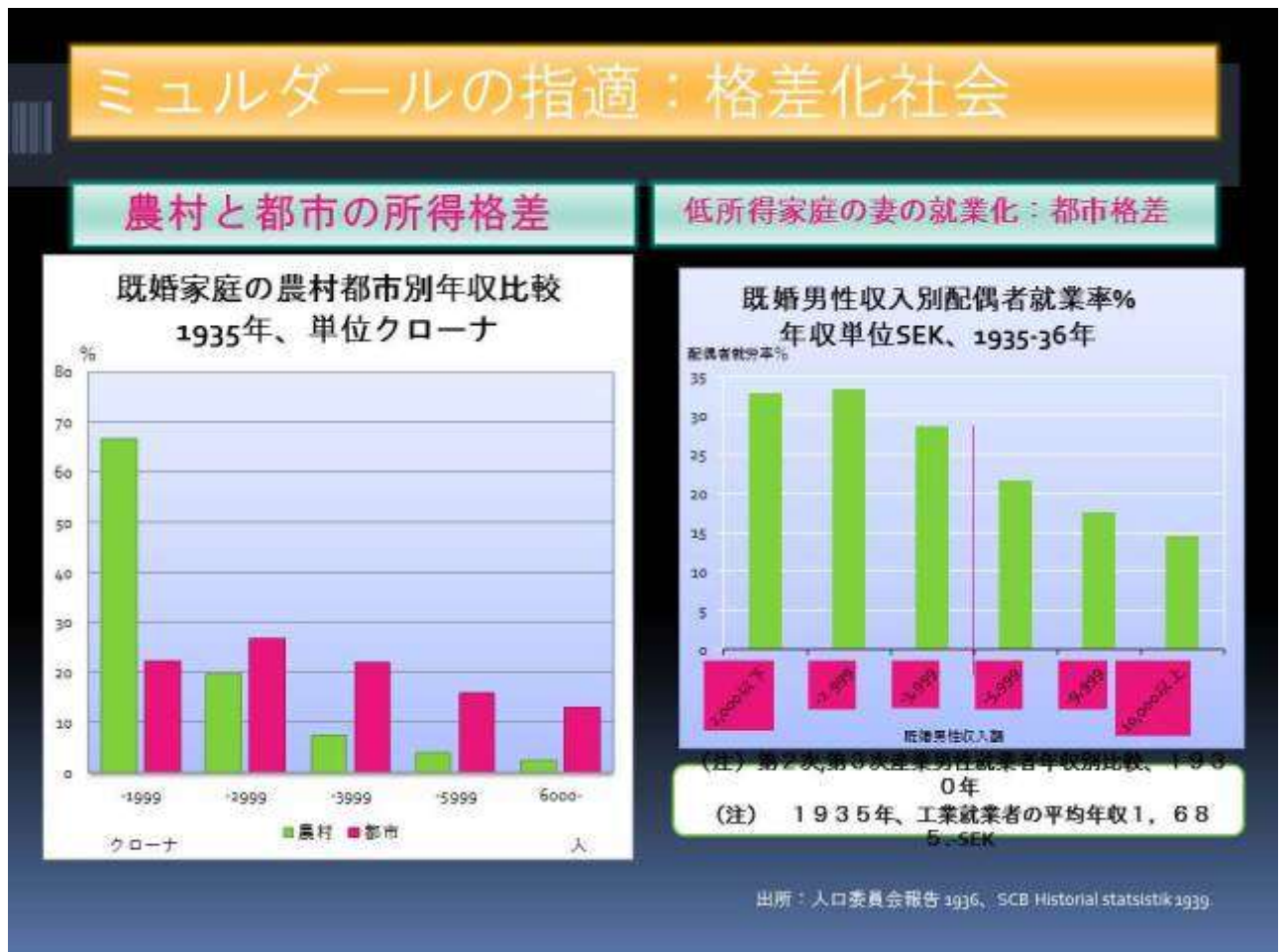
社会改革、所得再分配

この時に現われたのが、このミュルダール夫妻です。このミュルダール夫妻は、社民党が政権を取り始めたころですから、非常に信頼された科学者です。彼が唱えたのは、このままいくと、経済力がなくなる。格差社会が進んで行く。それが国力は低下になる。当時は、人口は、国力、軍事力に繋がっていましたから、それから、高齢者社会が進むと唱えた。ちょうど、今、日本で、数

十年指摘されているようなことが、既に 1930 年代に、このスタイルが提案されているわけですね。これには、抜本的改革が必要という事。特に、社会的な改革をしなくちゃいけない。初期的な資本主義社会ではやっていけないんだと。そのためには、所得の再分配をしよう、と言う、大きく言うところいう 2 点が指摘されたのです。ミュルダールの指摘したことについて、調査委員会が出来あがって、ミュルダールが指摘したとおりに、社会的格差が社会では進んで行ったことが裏付けられた。

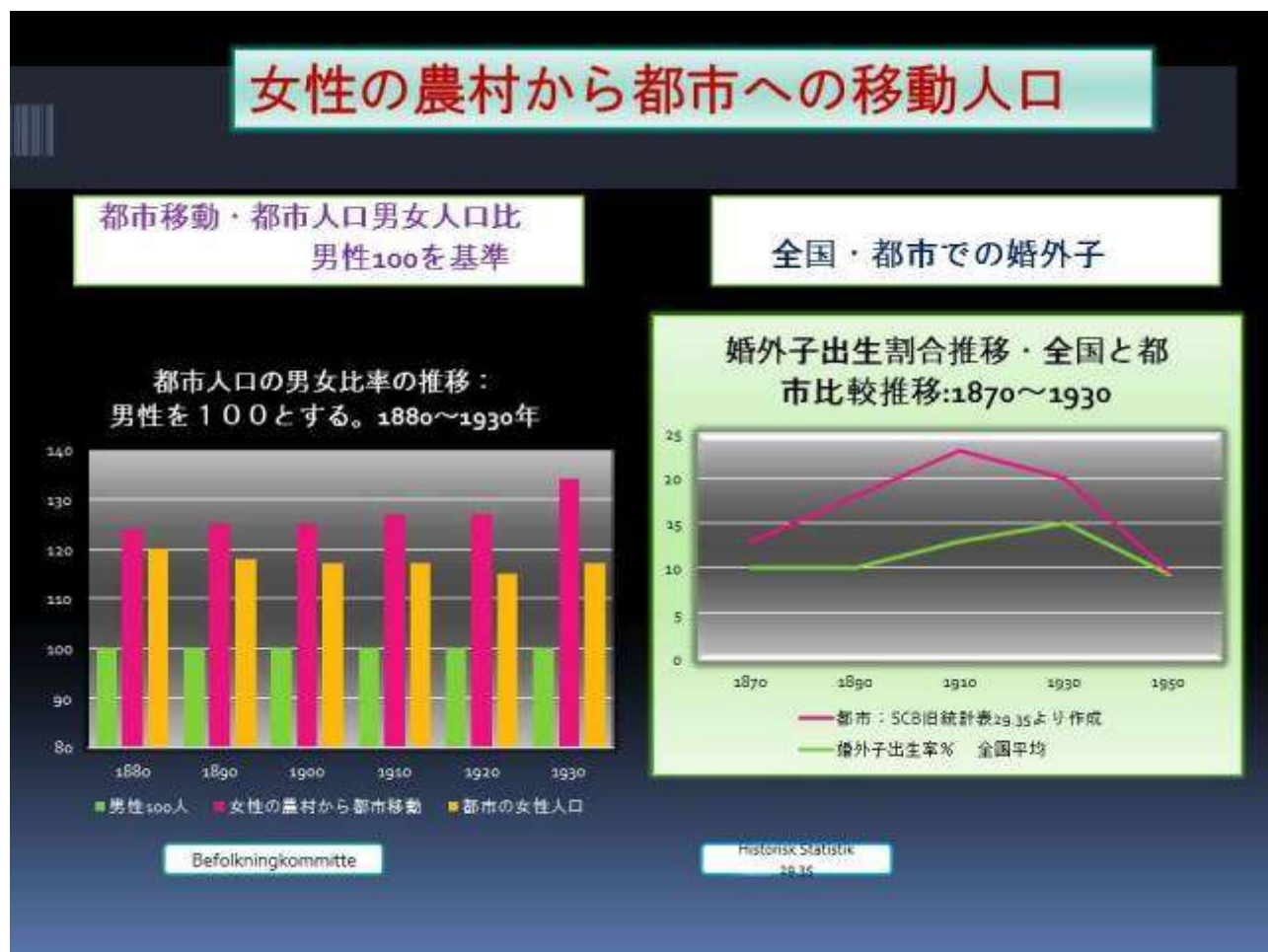
その実証の幾つかがここにあるものです。

まず、一つは、農村と都市の格差が広がる。この一つの裏付けになったのが、所得です。



緑が、農民の所得。赤が都市で働く人の所得。農民の所得は、都市で働く人の最低料金のレベルで、一番多い。ぎりぎりの生活をやっている人の所得が、農

村では、これだけの人がいるという事。それから、もう一つの格差は、都市における格差。これが、高所得者の人で、ちょうど真ん中が平均です。圧倒的に平均所得より低い人が、多いわけです。このままいくと、このグループの人が広がっていくだろうという事が、人口委員会が2年後に発表した数字で、まったく、ミュルダールが指摘した通りの数字が出た。



それから、もう一つ、都市の男女の格差ということも指摘されました。これは、なぜこうなるかと言うと、都市に流れる女性の数が、圧倒的に多かった。緑色が、男性が1としますと、赤いのは、毎年都市に流れる人口です。男性が、1の場合に、20パーセント以上の女性が都市に流れてきている。黄色が、都市人口。男性1の場合、女性がこれだけ多いという事。この女性たちに、全部、仕事があるかと言うと、そうではない。あったとしても、労働力の供給が多い分、女性は、非常に虐げられた。という事です。

結果的に、その証拠として、何が起きたかという、これは、婚外子の数字です。全国でも、女性は、虐げられている。縁なんですけど、都市になると、大体20パーセント、つまり、ストックホルムなんかは4人に1人が婚外子。この当時は、婚外子を産むという事は、たいへんなことで、ある自治体なんかは、婚外子を産んだ女性を教会の祭壇の前に立たせて、皆の前で、恥をかかせるというような激しい事をやっていた。子供たちも、競売にかけて、誰が面倒を見るといふ事で、一番安く面倒を看れる子供たちを引き取って行った。そういう時代でした。やはり、男尊女卑で、しかも、子供をこういうふうにつくっても、男性には、一切、何の刑罰も起きないという時代でした。

ミュルダール:人口問題の危機 1934

“人口問題の危機”

- ・出生率低下⇒格差社会⇒経済虚弱⇒国家衰退
- ・社会民主主義(所得再分配政策提唱)

女性就労を可能にする政策＝人口回復

- 労働条件改善(出産・育児休業・職業復帰)
- 保育園、学校無料化(給食＝栄養)
- 性教育・避妊具解禁(出生統制)
- 住居(住宅補助)

こういう証拠が出てきたわけです。ですから、ミュルダールが、「人口問題の危機は、格差社会を助成する。これが、すべての経済に影響して、国家の衰退に至る」ということを言ったのですが、今、ようやく、社会民主主義的思想が

広がってきた訳なので、その主なる手法として、所得の再分配をやらなくちゃいけない。という事を伝えたわけです。

具体的には、女性の労働を可能にする政策、そうすれば、女性の条件を良くすれば、家庭が潤うので、子供も回復する。そのためには、労働条件を安全、出産、育児、それから、職業の復帰、保育園を作る。学校の無料化、給食、それから、ここで一つ、全く、よその国では、出なかった性教育を進める。それで、自分たちの、ライフコースを決めることが出来る。というようなことを、既に1930年代に言っている。

ミュルダールの提案と成果＝家族政策の初め

提案

- ・ 出産費用の支援
- ・ 妊婦の出産時と産後の休業
- ・ 育児手当(低所得者家庭)
- ・ 出産後の職場復帰権利と保障
- ・ 託児所・保育園の増設
- ・ 多子家庭への住宅補助
- ・ 健康管理、歯科治療
- ・ 学校教育の完全無料化
- ・ 学校給食無料化
- ・ 高等教育の奨学金制度の確立
- ・ 学校での性教育
- ・ 性知識広報活動(多子家庭に避任用品の無料配給)

施行

- ・ 出産前後期の妊婦と乳児の衛生・育児指導
- ・ 妊婦支給金
- ・ 家族課税の減税
- ・ 住宅・住居ローン支援
- ・ 既婚女性の職場復帰の権利保障
- ・ 公共託児・育児保育園
- ・ 学校教材・給食支援、衣類支援
- ・ 幼児・学校生徒の無料健康診断
- ・ 避妊具使用解除、避妊法改正
(医学的、人道的理由のみ限定)
- ・ 性教育：(実験的に1942年、1954年から全学校で実施)

それで、現実に人口委員会で提出された、これは、80パーセントくらい、ミュルダールが出しているものなんです、左側が提案されたことです。性意識の高揚なんていうのは、キリスト教の強い国では、大変な事だった。本を読む

と、これを支援した教授が、逮捕されて豚箱に入るという時代でしたから、よほど、勇気が必要だった時代ですね。

その後に施行されたことが、ここに書いてあることです。今でも、対比されているのですが、今と違う大きな点は、これは、貧困、低所得層者グループをターゲットにしたものですが、今の政策は、全スウェーデン人口に適用されるものであること。そこが大きな違いでしょうけど、これが、スウェーデンの家族政策の根本、土台となるものと言っていると思います。

そういう訳で、スウェーデンは、こういう政策を進めて行ったんですが、戦争が始まった

わけですね。スウェーデンは、ご存じのように、中立を保っていた。中立は、経済面だけではなく、今、スウェーデンが、人道的に移民を受け入れるなどという思想が強いのは、やはり、戦争をしなかった中立を維持したことから始まる。それが根本だと思います。

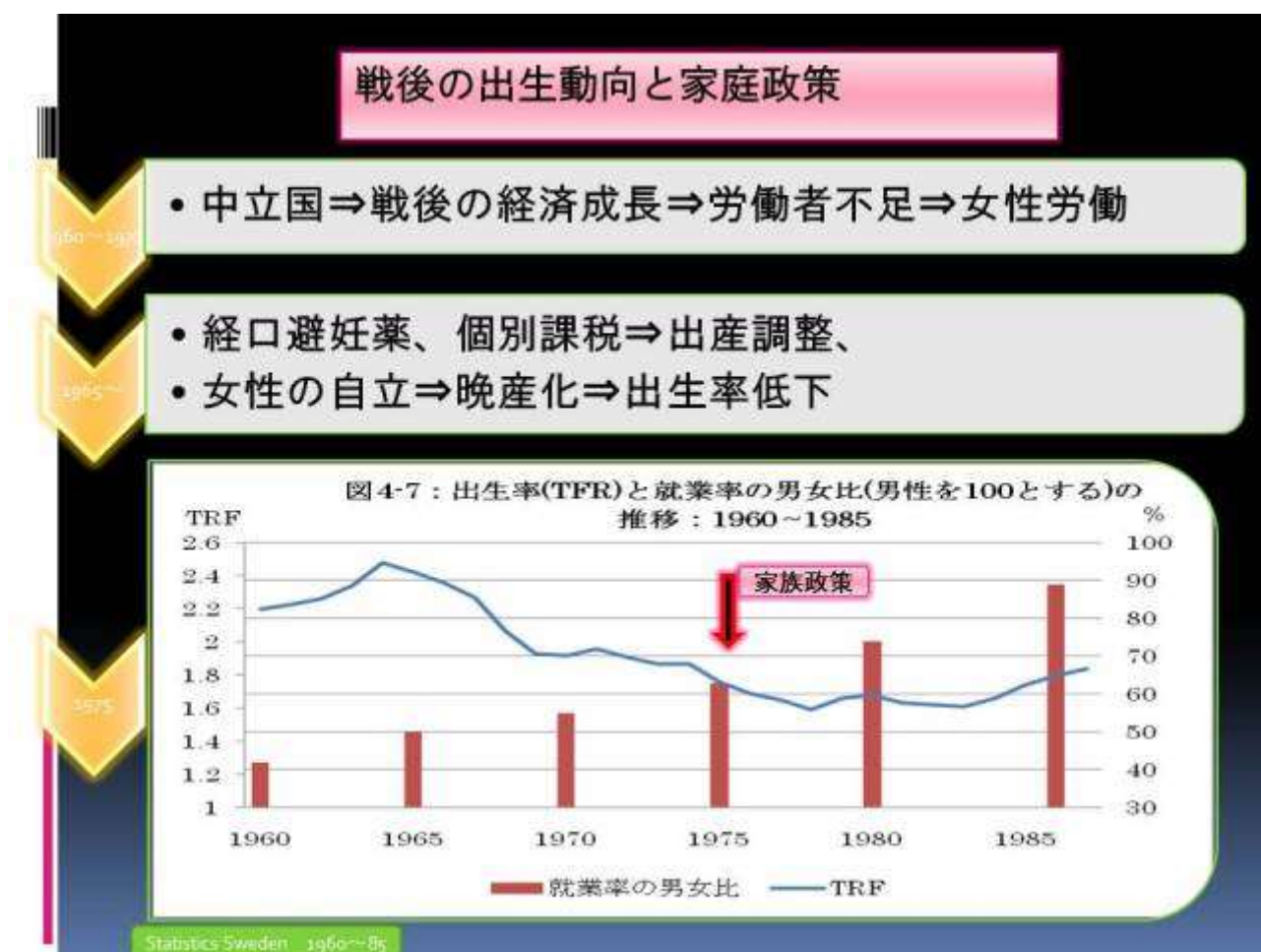
今日のテーマから外れますが、スウェーデンには、たくさん難民が来ています。最近では、ルーマニアから、いわゆるロマと言うジプシー系の人々が、そこらじゅうで物乞いをしています。生きようとする人に手助けするというのは、基本的な考え方です。ご存知のように、戦争中、デンマークやノルウェーのユダヤ人を受け入れたのは、スウェーデンだけです。

それが、戦後、世界中から、スウェーデンは、立派だと褒められたのは、一つの誇りになっているんですね。それが、当たり前のことをしていただけだとスウェーデン人の一つの誇りでもあるんですね。周りの国が、戦争で、復興に大変な時に、スウェーデンは、輸出できて、経済成長をものすごいスピードで出来た。今でいう中国のような感じ。その当時は、インターネットだとか近代技術がない時代。中国のようなスピードはないですけど、毎年、年、6~8パーセントの成長が続いている。既に、農業人口は、30パーセントに落ちている。ものすごいスピードで経済成長したため、労働力不足になり、ユーゴスラビア、南ヨーロッパから労働力を募集した。それでも、足りない。イタリア、ドイツでも、復興が始まると、みんな帰って行った。そこで、目を付けたのが、やは

り、女性です。女性に、何とか、働いてもらおうと、考えられた。人口学的に言えば、ピルが解禁されたこと。これは、非常に、女性解放に繋がった。今、子供が出来たら、どうしようという障害が、これでなくすことができるという事で、世界で初めてピルの解禁が始まった。

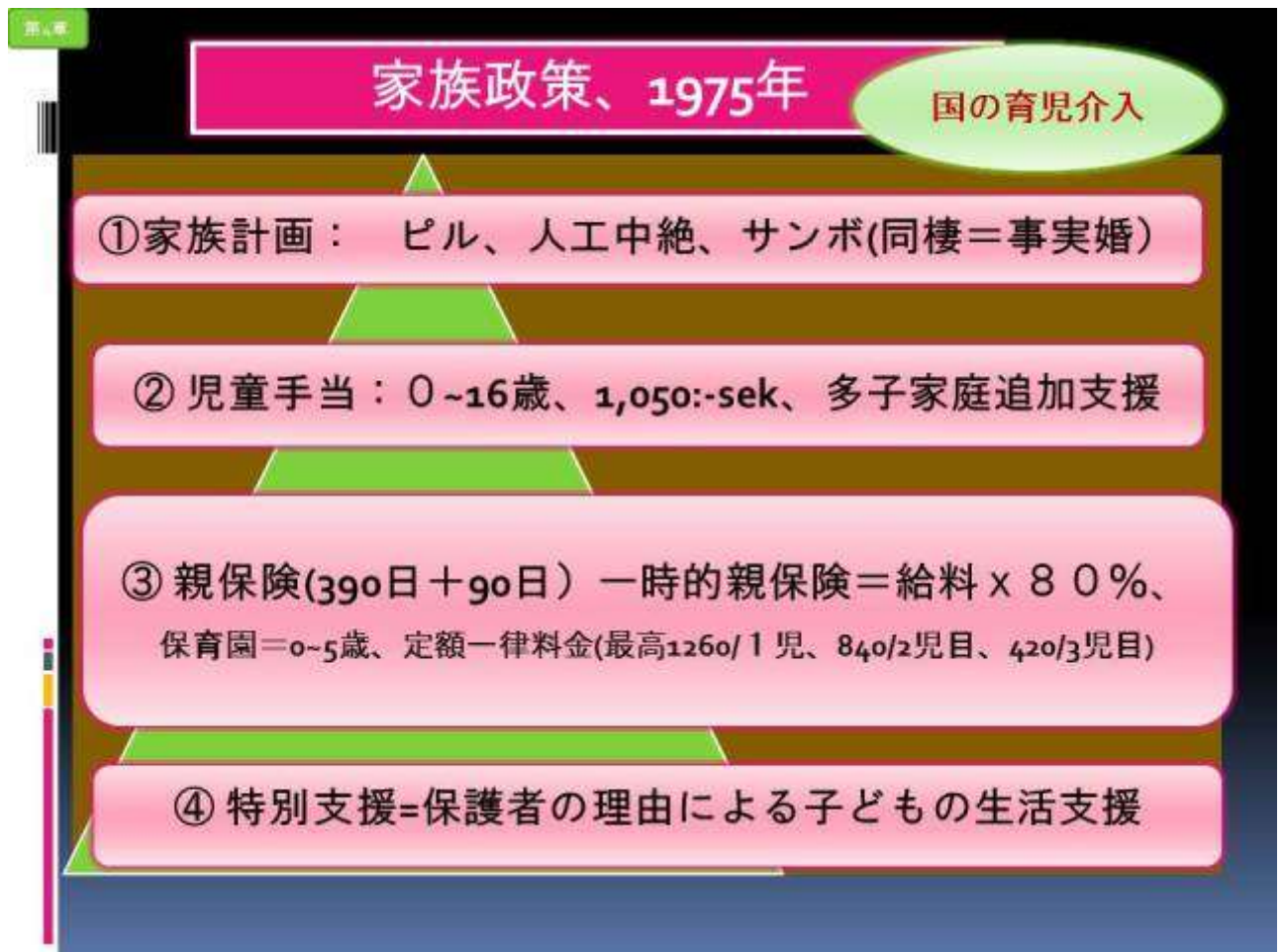
それから、個別課税、夫婦課税を禁止して、個別課税にする。個別課税にして、夫婦であれば、所得が増える。これは、女性の独立を目指して、女性のライフコースの復帰が出来るという事で、非常に、あっという間に広まった。

ところが、この政策は、思わぬところに弱点があったわけです。それが、女性が、結婚するのを先延ばしして、晩婚化が進み、出生率が低下したわけです。



これが、いわゆる 1950 年代頃の男性に対する女性の就業率ですが、十分上がっていますが、ここも出生率は、この女性が進出すると下がっていますが、これは、一つの危機と捉えたという事なんです。1975 年にスウェーデンは、

「家族政策」と言う大きな政策を立ち上げたんです。それは、これからは、女性も働く社会になるという事で、家族、人口政策ではないんですね。家族が幸せになるための政策を抜本的に作ろうじゃないかという事です。スウェーデンの家族政策というのは、いったい、どうなのかということを見てみますと、まず、一つは今まで、所得が低い人、母子家庭とかいわゆる弱者だけの手助けじゃなくて、初めから国民が生まれた時から子供の育児には、国が助けようという事を決めたんですね。



これが基盤です。これに従って何が必要かという、家族政策には、四つの柱があると思うんですが、一つは、ピルの解禁、人工中絶、同棲と言うのを事実婚にしよう。これは、何を意味するかというと、家族計画は、自分たちが、家族が欲しいなという事を自分たちで作れる。いわゆるライフプランニングが出来るようにしようという根本的なもの。次にあるのは、児童手当。今までの児童

手当と言うのは、低所得者、片親家庭だったんですが、これは、全部に与えよう。それから、たくさん子供がいる人には、追加しよう。

なぜ、こうしたかという一つの理由を探ってみると、子供の立場を考えてみると、学校の教室の中で児童手当をもらっている子といない子があれば、その子供は、平等に感じないだろう。それを考えてくれてそれも大きな理由になっている。裕福な人にもなぜ、児童手当を出すかという事なんです、子供までに、差別を感じるような政策は、よくないというのが大きな理由の一つなんです。

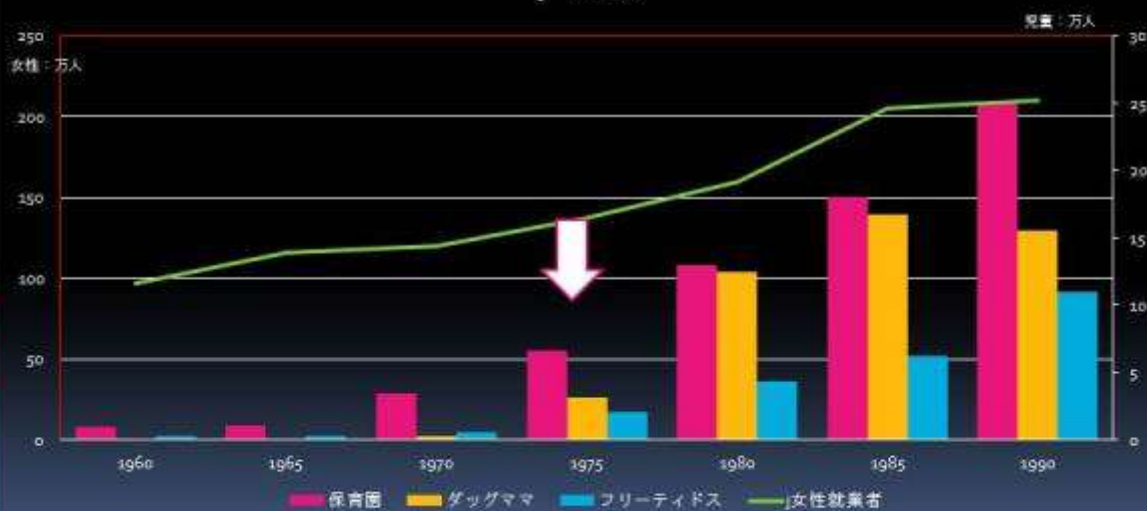
三番目は、親保険。昔は、短かったですが、現在は、390日は有給。90日は、それ以上休んでもいいですよ、但し、その期間は、親保険は入りませんよということ。この期間中は保険取得を理由で解雇されることはない。それに、一時的親保険、子供は、いつでも病気する。風邪を引いたから休むとか。その他、保育園は、現在、最高定額、入園料と言うのでしょうかね、それが決められている。高所得者に対する恩恵だとの不満はある。特別支援、特殊支援は、親の病気、失業、ケガだとかの時、子供の生活の支援はしましょう。子供に引き継ぐ事はさせません。ということで、こういうものをつくった。

そして、1975年に家族改革と言うのが起きた。

問題は、保育園のキャパシティ、必ずしも、カバーできなくて、何カ月も空きを待つという事がありました。それを解決したのが、今は、なくなって、ほとんど、ないんですが、スウェーデン語で、ダーグママ。昼間のお母さんと言う意味。家庭の中で、私のうちで、2, 3人、面倒見ますよ、ということ。それをやると、一つのキャリアになり、この後、保育園で働く資格になる。日本でいう学童保育、これが増えたわけです。これだけの施設を20年の間に増やしていった。子供が保育園に入れない状態は、既に15, 6年前に解消しています。女性が労働市場に出る時、この計画は、計画通り進んで、保育園の先生は、あまり人気のある職業ではがなかったのですが、ステータスを上げようと、給料もあげ、働く人も増えていった。

女性就業率と支援受給児童数の推移：1960～90年

保育園：約1～6歳、ダッグママ1～12歳、フリーティドス：7～12歳、



ブレ
スクール



保育と教育
3～5歳
15時間/週
無料



スウェーデンの保育園はダグヘル。ダグと言うのは、一日、昼間と言う意味です。昼のお家という意味で、リミットが小さい。一組が大体 20 人くらい。昔の方が、2, 3 人で少なかった。こういうのが一般的です。現在は、どういう風になっているかというと、保育園は、子供を預かる場所、という事で、働いている人も、親も不満が多くて、「子供は、ただ、預ける場所ではない。保育園であっても、一応、教育の場だ」ということで、厚生省から、教育省に管轄を移した。それで、一応学校の形になり、カリキュラムがでて、現在 3 歳から 5 歳までになると、15 時間は、無料。

どういう事かと言うと、家庭でいる子供も週に 15 時間は、ここにきていいよ。例えば、2 人子供がいる場合に、お母さんが 2 番目の子供を産んで、お父さんか、お母さんのどちらかが家にいる場合に、その時は、預けられないのが

原則ですが、その時は、週 15 時間は、ここにきて、みんなと遊ぶことが出来る。

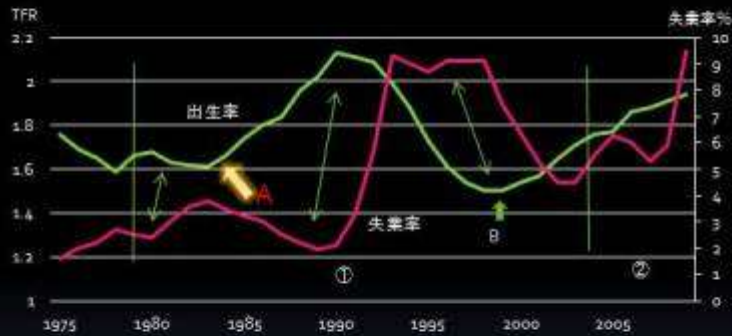
スウェーデンは、これだけやっていて、それでも、いわゆる少子化が起きたわけですね。少子化と書いたのは、日本向けに書いたもので、本当は、出生率が低下したということですね。

「少子化」というと、長いこと、出生率が落ちてきたような動向なんですが、出生率が何度か下がって行った時にただ傍観していたわけではないのですが、その時のスウェーデンの対策は、どうしたかという事を見てください。

低出生率対策、1980

1

出生率(TFR)と失業率 推移：1975-2009年



ICB/Statistik Sweden: スウェーデン統計局分冊印刷、歳次集刊(4K)印刷

出生率波動原因

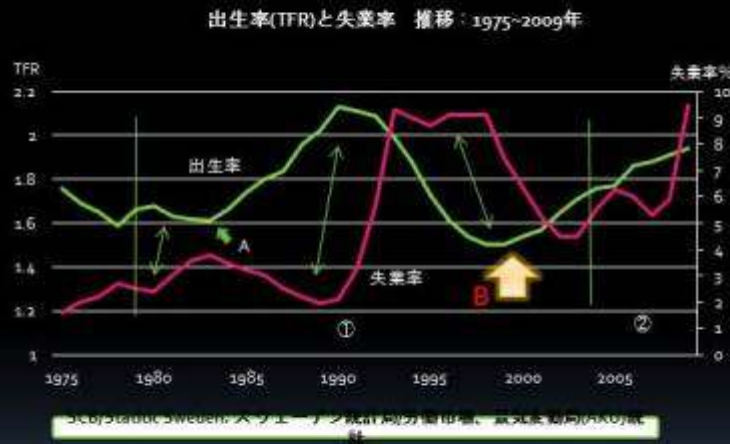
-出生率動向の特徴
失業↑出生率↓

対策

A: 1980年代
女性の高等教育推進
スピード・
プレミアム制

低出生率対策、1990年代

2



出生率上下波動原因

-出生率動向の特徴
失業↑出生率↓

-親保険制度の特徴
収入×80%⇒出産の先延ばし

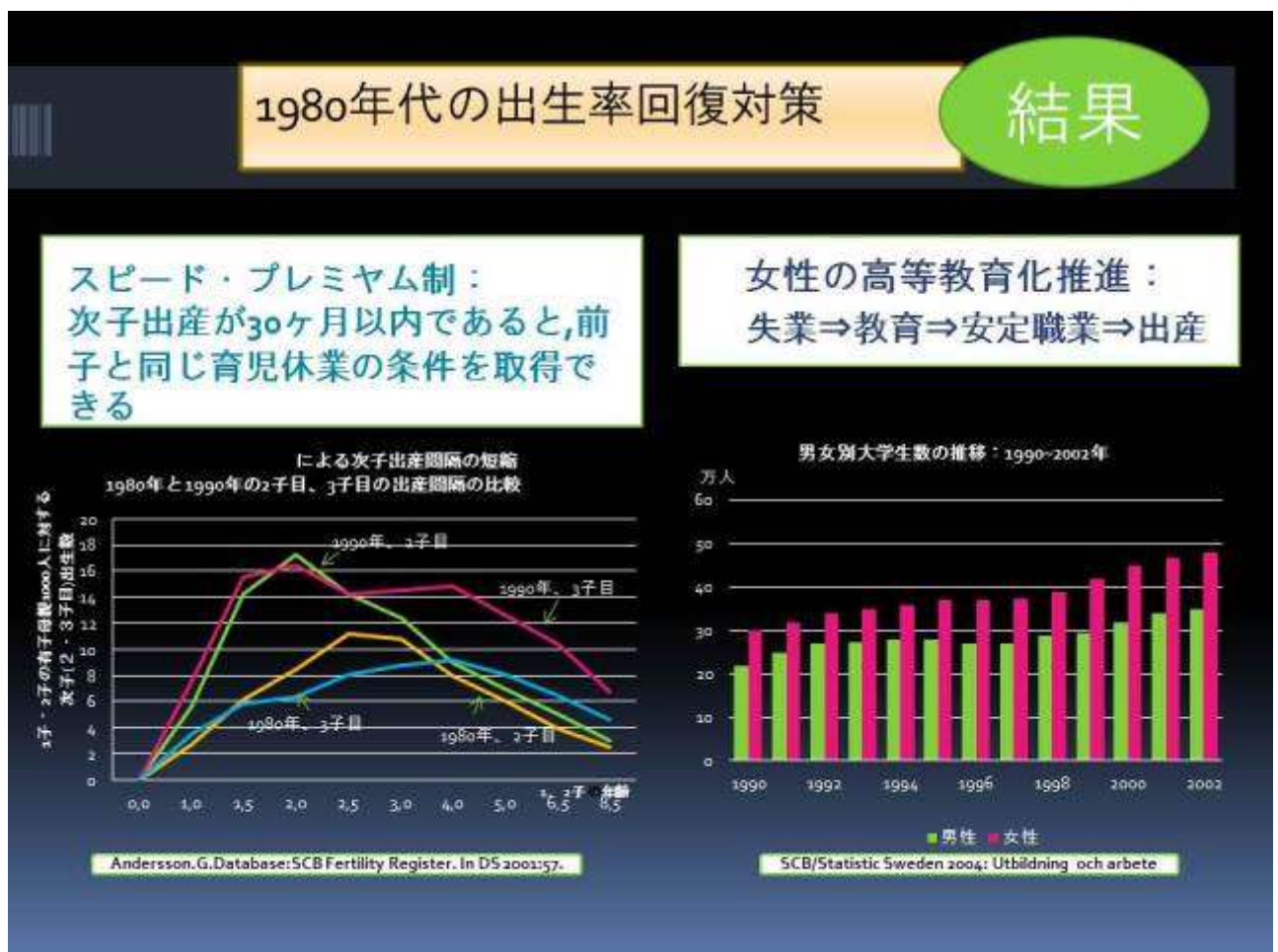
対策

- B:** 1990年代
育児休業日数延長
育児休業80%
男女均等推進強化

御覧のようにスウェーデンの出生率は、ジェットコースターというんですね。上がったたり、下がったりが激しい。この図を見て分かるように、緑色の図。上がったと思ったら、下がった。ここから始まる。これは、何が影響するかというと、「経済が悪くなった後は、出生率が下がる。」という傾向がある。なぜ、そういう事が起きたかという、スウェーデンの親保険の仕組みが原因。親保険は、働いた時の給料の80パーセント貰えるわけですが、それは、1年前の給料のレンジに対してです。景気が悪くなって、賃金が上がらない時とか、失業になった時、それを基準にして親保険をもらおうと損しちゃうから、不景気になると出生を先伸ばししてしまう。ですから、こういうことが起きた訳です。

これに対する対策が、一つは、1980年代、失業するグループは、誰かという事を調べてみると、圧倒的に多いのが、女性。しかも、高等教育を受けていない女性が多すぎる。

この女性たちを何とか少なくしようという事で、女性の高等教育化という事がものすごく進んだ。女性ばかりではないが、勉強する為、「1年間会社を休ませてください」と言うと、企業は、これを断ることはできない。復職もできるという法律が出来た。



もう一つは、スピードプレミアムと言うのがありますが、子供を続けて産んだ時は、一番最初の子供を産んだ時の条件を継続させてあげよう。なぜ、そういう事をするかというと、一人産んで、また一人生むという事は、母親には、また、会社を休んで、また戻って、苦勞する事より、どうせ産むなら、短い間に二人産むようにしたらどうかというアイデアです。

これが、実際、どれだけ機能したかという点、あまり機能しなかった。さっき言った、女性の高等教育化が進んだんです。スウェーデンほど、女性の高等教育化が速く進んだのは、珍しいんですが、さっき言った最初のプレミアムを少し、変えようと、次の10年近くなってから、もう一度、出生率の上下が非常に激しいという理由です。それで、1990年代、女子の教育を進めようと最も力を入れて来たのが、男女の均等主義の強化です。1980年代からもうやってました。10年後に、スピードプレミアムの24か月じゃちょっと足りない。6か月引き延ばそう、ということになった。調査した結果、子供が生まれて、すぐ産むというより、ちょっと、余裕を持たせる、30か月という事にした。



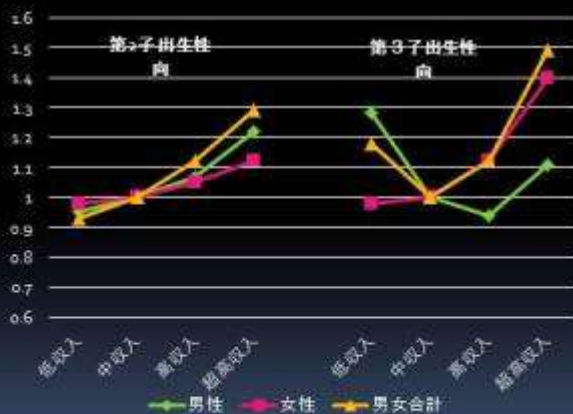
30カ月にした成果をグラフにしてみると、一番下の24カ月のグループ、これは、一児と二児の子に攻撃を受ける率を下げよう。それには、女性の教育しかないという考えでやったところ、既に、1990年代には、これは、大学生の数

ですが、圧倒的に女性が多い。既に、スウェーデンでは、医者、弁護士は、男性の上級な仕事だったんですが、女性で占められてきている。これらの政策は、教育によって、女性の地位を上げ、職業を安定させ、家族政策によって出産をキープするという考えです。今まで、1990年代までは、不景気とか、失業とか、女性が一番打撃を受け、出生率が落ちる傾向があったんですが、今世紀に入ってから、2000年に入って、あまり影響されていない。リーマンショックとか色々あったんですが、グリーンの線が影響なく、出生率が伸びている。なんで、そうなるのかという事が討議されて、社会学とか人口学とか研究を始めたのですが、彼らの主張は、これは、男女均等政策が進んだから、これが大きな出生率に影響するんだということを強く唱え始めた。この社会科学的な裏付けによって、国会で大きく討論され、その中で、第二子の出生率は、父親が育児参加した家庭では、父親が育児休業を取らない家庭より2番目の子供を多く生んでいる。つまり、父親が、一生懸命、家庭の仕事をしたりするという一つの裏付けです。それから、この離職調査は、世界で言われていた、女性が一杯働くと出生率を少なくすると言う主張に対する反論です。

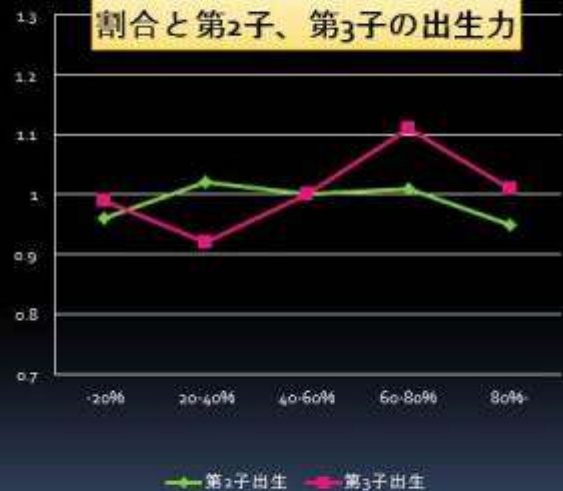
家族政策の効果

第2子出生までは収入の影響が少ない
第3子は収入が影響する

収入別第2子、第3子出生率性向



合計収入に占める女性の収入割合と第2子、第3子の出生力



RFV.Riksförsäkringsverket.Analys 2003;8./ 国立保険庁研究報告2003.No.8.

これは、左側ですが、どこの国でも、一人目の子供を産むのですが、問題は、第2、第3ですね。貧困をキープされるのは、収入によって、出生率がどう変わるかをみたもの。所得が低いところと、ある程度高い、すごく高い、現実的には、あんまり大きな差はない。もちろん差はあるが、これは、人口の数字を変えるほどのものではない。ここにある超高所得者もありますが絶対数が少ないですから、相対的に人口に影響する事はないわけです。この機能が3番目の子供を産むとき、所得とどう関係があるかと言うと、いろんな形が起きます。ここに、男性の所得が低いと出生率が高いのは、多分これは、子供の育児が非常に好きな男性が多い。奥さんの方の給料がいい。確かに、所得が上がると、こういうふうに出産率が上がる。相対的にみると、2番目の子供を産むときに、あまり、所得に関係はないのが、スウェーデンの特徴。3番目の子供を産む時には、所得がある程度、出生に影響してくる。こういう調査結果です。

もう一つ、興味ある事は、家庭の中で、母親の所得の占める率から出生率を見たものですが、母親の所得が、家庭の40から50%占めるところを1としますと、このような結果が出てくるわけです。緑色が第2子出生、下の方、紫が、第3子を産むとき、2番目を産むときはほとんど、影響を与えていない。父親の給料が80パーセントあって、母親は、パートでしょうね。そういう家庭でも、ちょっと差はありますが、人口の数を変えるほど、大きく影響する事はない。

母親の給料が、80パーセントに行くと、キャリアが相当あり、忙しい、それも絶対数において、人口の出生力に関しては、あまり影響がない。第3子になると、ちょっと、影響が出来るが、これは、時間がかかるので、さておき、スウェーデンでは、子供を2人産むことに関して、夫婦の所得バランスの如何にかかわらず、子供2人は、産めるものだという事を証明しています。

男女共同参画社会への挑戦 ???

男女均等政策と支える実証研究

(家庭内男女均等⇒父親の育児休業取得率をバロメーターとする)
父親育児休業↑出生率↑ 母親学歴↑父親休業率↑

父親の1子目の育児休業取得有無と2子目の出生力の違い



父親が育児休業を取った

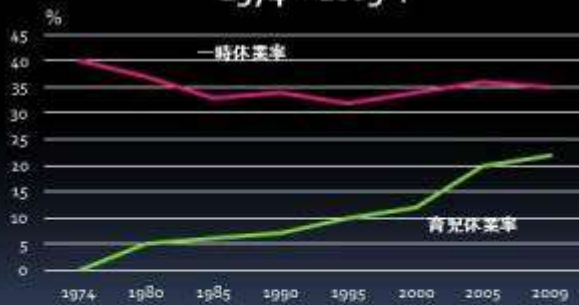
父親が育児休業を取らなかった

SCB, Statistics Sweden, Welfare Bulletin No. 2, 2002, p. 5; Livia Sz. Olah

男女均等の長期的戦略

学校教育・職場教育⇒男女均等浸透と家族政策
均等理念が人々に浸透すると家族政策が容易になる

父親の育児休業率と一時児童
看護休業率の推移：
1974～2009年



Försäkringskassan & SCB Statistics Sweden

男女共同参加社会への挑戦(長期戦略)
学校・職場・成人教育⇒男女均等の価値観

Det upp till vankrassa morarna barn



Barnkunskap Läroböcker, grundskola

男女均等政策の展開

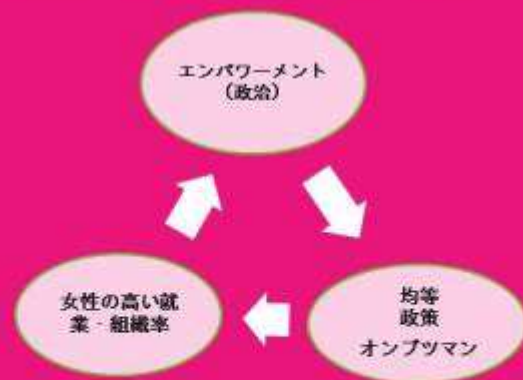
男女均等

量的均等＝教育、職業、文化、政治、活動

質的均等＝男女の経験、知識、思考の尊重

3 要因の連鎖的關係

高就業率・組織率(80%) ⇒ 政治力 ⇒ 执行力



女性国会議員割合推移、%



また、パワーポイントの順番が変動したり、割愛した番号もあります。

スウェーデンの今まで話し、行政的対策から生まれてきたものです。しかし、本当に男女均等、平等から考えると、価値観をメンタリティの問題で、女性も男性も本当に平等だという事は、なかなか、政策では変えていけない。スウェーデンでは、今まではなしたような、短期的な行政的対策はあったでしょうけど、長期的な戦略があったはずだと思い、保育園から、学校の教科書を調べてみました。1960年代、社会科の絵、台所でエプロンをかけ、子供の面倒を見ているのは、お母さん。それが、1990年になると、お父さんが子供の面倒を見ている。お母さんが、今日、会議で遅くなるから、お父さんが面倒見ていると書いてある。こういうのが、時代、時代ではっきり出ています。日本と比較すると、日本も学校で、平等を言います。生徒会長になるのは、ほとんど男。先生方が相談するのは、ほとんど、男の子。

面白いことは、スウェーデンで、保育園でも、均等化の為の活動が起きた。国は、均等化のための活動の為に、かなりの金を出し、勉強会をさせ、報告書を出させた。最初は、保育園側も、やり方が分からなかったが、1, 2年たつと均等という事がわかる様になった。子供たちにおもちゃを渡す場合、最初、男の子には、自動車、女の子にはお人形を充てていたが、どちらがいいか聞いて欲しい方を渡す。先生が、「物を取って」と頼むのも、70パーセント以上が、女の子。それは、均等ではない、という事が浸透している。そういう子たちが、今は、お父さんになっている。だから、スウェーデンの子供たちは、今日の晩御飯を作るのは、誰と聞きます。私の息子も、職場が、家に近いので夜の食事を作るのは、80パーセント息子です。それに違和感がないのがスウェーデンの社会です。

この長期的な戦略の一つの証拠が、父親がどれだけ育児に参加しているか。これを100パーセントにしたら、今、25パーセントです。多分、少しずつ上がっていくと思いますが、出来たころは、全く理解されず、5から6パーセントだった。ここら辺では、いろんなことが行われました。例えば、社会庁の大臣が、大臣になって半年後に、「私、育児休暇取ります」と言って5カ月休んだ。日本でもどこかの知事がありましたね。ああいうのは、とても、インパクトを与えて、効果を上げて、段々今伸びている。育児休業が非常に硬いんです。まず、女性が休みます。これは、結局、スウェーデンの家族は子供を大切にするという一つの証拠ではないか、と思います。つまり、子どもが風邪を引いたから、両親の方どちらか、家にいなければいけないという時に、母親が仕事の都合で、「今日、会議があるんだけど、お父さんはあるの?」、「いやないよ」、「それじゃ、お父さん休んで頂戴」という風に、男女均等の長期戦略が徐々に浸透して来ている。

これは、長いスパンで1974年から、もう25年もかかってこれを推進しようとしている人たちは、遅すぎると、イライラしているのが現実です。だけど、一般の人は、「もういいよ。男女平等の話は、もう聞き飽きた」と言う人がたくさんいます。

ところが、去年あたり、スウェーデンの大学の社会学の先生が、新聞に大きく書いて、「今、うるさいと言って、これをやめれば、洪水の堤防みたいなもので、いったん崩れると、また、洪水のように元に戻ってしまうから、うるさいと言われても、堤防を積み上げていかなくちゃ駄目だ」と。そう言っています。確かにそういうところがあるんだ、と思います。これは、いろいろ問題があって、移民が多いのも一つあって、移民の人達は、なかなかアクセスできないということがあります。

このスウェーデンのダイナミックな力は、どこから生まれたかと考えてみると、一番大きいのは、やはり、さっき、歴史から見ていったように女性の働きということですね。

しかも、弱いものは、組織を作って、みんなで歩けば、赤い信号も怖くない、と言うような感じで、女性の力が組織されている。今でも、今、保守政権に代わってから労働組合の組織率は落ちているんですね。70パーセント以下になっているんだらうと思います。女性は、依然として、80パーセント。この組織力で、女性の力を挙げて、政治的に参加する。その政治で作られた政策をしっかりと守る。この循環が、女性の力、機動力をキープしているんだと思う。

やはり、一番社会を変えるのは、政治の力がなくちゃいけない。皆さんも知っていると思うんですけど、国会議員の数の推移ですが、公共の地方自治体も国政も、女性は劇的に増えている。社会的問題はたくさんあります。それは、女性が、まだ、平等に達していない一つの理由は、低賃金労働は、女性が占めている。例えば、介護の分野。絶対数がたくさんありますから。そういう所には、また外国人もいっぱいいますし。それから、パート、地方に行くと仕事がないというわけで、誰が犠牲になるかと言うと、やっぱり女性。それが、大きなこれからの課題ですね。本当の意味の均等はまだ、時間かかる。

一つ、未来的な事を言いますが、スウェーデンでは、平等というよりも、均等という言葉をよく使う。イエムデーカと言うのは、平等なんです。イエンスタールと言うのが、均等。

平等と言うのは、人間の基本的な価値観を述べている。例えば、男女間が「あなたと私は、平等ですよ」、「国や民族が違ってても平等ですよ」。その中では、最近では、いわゆる性的な面のジェンダー、中性的な男性がいたり、女性がいたり、同じ価値観を持って平等です、という非常にマクロ的なものです。その中に、均等という理念がある。均等とよくスウェーデンで言われる。

なぜ、均等かと言うと、均等の中にも、質的なものと、それから量的なもの、量的なものをまず、わかりやすいものから、スウェーデンは、直していこう。つまり、量的とは一体何か。例えば、教育と言う場合。女性も男性と同じように、教育を受けて、高等教育を受ける権利を持つ。それから、職業も、一般的に上級職員が何人いて、男性は何人いて、これも、同じような数字を持っていくことが出来る。文化的にもある。例えば、男性が入っちゃいけないよ、とか、日本にも、相撲の土俵は、女性が入れないように同じようなことがあります。同じかどうかわかりませんが、例えば、スウェーデンで、教会。牧師さんは、絶対、男でなくてはいけない、という事がありました。でも、今は、女性の牧師さんが何人もいて、男性の牧師さんが何人いるかという事も見える。もちろん、政治にもそうです。文化的と言うのは、難しいんですけど、サンタクロースがお母さんになるというのは、申し訳ないですけど、まだ無理です。

質的均等とは、一体何かと言うと、よく、あるじゃないですか、「女のくせに言っちゃいけない」とか、女性の思っていることは軽くみられる。そういう意味です。それから、女性の持っている知識を軽く見る。こういうのを同じようにバランスをとる。

ということが、均等という言葉にあるんですが、スウェーデンでは、それを分けて言っているわけです。

ちょっと、話が長くなりますが、とにかく、僕個人が思うには、政治だと思わんです。

民主主義の国では、みんなが思っていることを政治に反映させることなんですよ。今の、安部首相が、女性、女性と言うんですけど、よくよく見ると、4人しかいないんですね。女性の起用30パーセントうんぬん言っているんであれ

ば、初めから、30パーセント入れれば、いいと思うんですけど、今年、この前出来た内閣ですが、12年、安部総理は、女性の為に先を行って、悪い事ではないですが、ただ、スウェーデンと違うのは、安部さんの言っている「今、女性が必要だ」というのは、どうも、表面的。例えば、「台風が来るから、みんなそれに準備してください」というレベルで、スウェーデンの場合は、「津波が来るから準備して下さい」というこの二つの大きな違いがある。

話が長くなり、これで終わりなんですけど、少しでもスウェーデンの社会、少子者を言いましたけど、現実的には、これは、ジェンダー論的な面から作ったパワーポイントです。

それをまとめた本があります。ご質問のある方は、メールください。日本語をうまい具合に話せず、いらいらしていましたが、皆さんご理解できましたでしょうか。

スウェーデン研究講座 第169回 2014年12月18日

「スウェーデン現代詩人——ハリー・マーティンソンの世界」

解説と講演：児玉 千晶 翻訳家

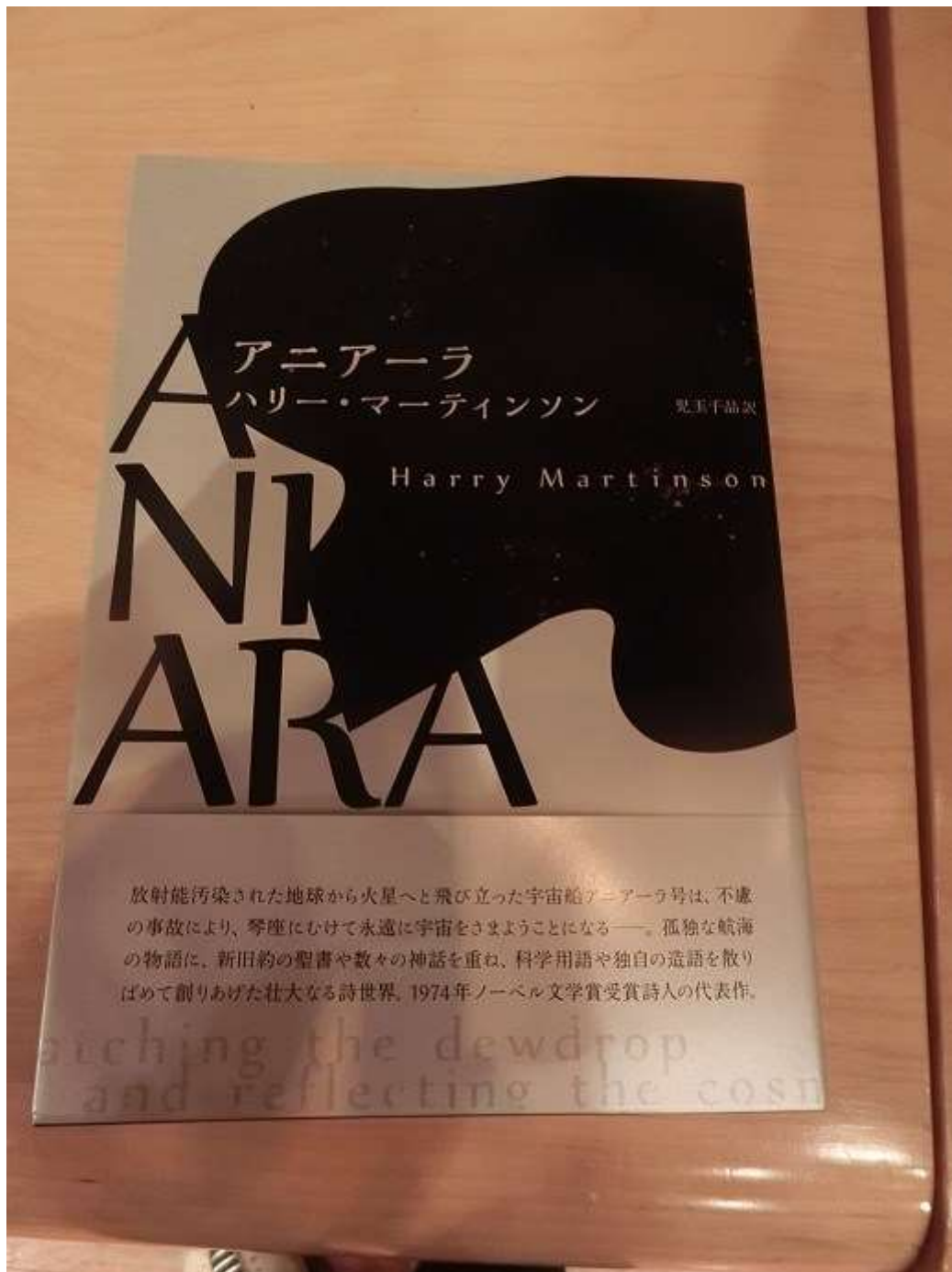
朗読：毛利 まこ、溝口 園枝、和田 ゆいま

(編集部から：講演で映し出された作品集は著作権の関係で転用・掲載はできません。文中のハリー・マーティンソンの肖像と船の写真は児玉氏の提供)



私は、社会学を専攻する夫の留学に伴って、1984年に、初めてスウェーデンに渡りました。その時は6年間滞在し、長男を出産しましたが、出産費用もスウェーデン語を学んだ学校の授業料もテキスト代も、すべて当時は無料でしたので、私はスウェーデン社会にとってもお世話になりました。ですから、御恩返しのような感謝の気持ちと、スウェーデンの文化をもっと知りたい、大切にしたいという思いから、スウェーデン語を学ぶ様になりました。

そしてそれは文学の翻訳に結びついていきました。『アニアラ』の日本語訳は、スウェーデン王室のクリスティーナ王女様がとても強く望まれていたことです。王女様にこの作品の素晴らしさを伝えたマーティンソン学会のヨラン・ベックストランド氏、そして直接に原著をご紹介くださったスウェーデン大使館のラーシュ・ウァリエ元大使も、『アニアラ』をぜひ日本語で日本に紹介して欲しいと、惜しみないご協力をくださり、そのようなマーティンソンへの熱い思いに支えられて出版の運びとなりました。これほどまでスウェーデンで愛されている詩人とその作品とはどのようなものだろうか、というのが関心のきっかけでしたが、マーティンソンの作品に溢れている、豊かな感性と情愛のこもったヒューマニズム、博識に裏打ちされた奥深い言葉の数々にとても感銘を受けました。



ハリー・マーティンソンは、スウェーデンが世界に誇る素晴らしい詩人であり、作家です。このような形で詳しくご紹介できますことを、とても嬉しく思います。この作品はすでに英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、アラビア語など、多くの言語に翻訳されていますが、2012年には、その年

にノーベル文学賞を受賞した中国の作家の莫言（もー・いえん）氏もまた、翻訳とともに中国語版を出版しています。

せっかくの機会ですので、今日は、解説に伴い、日本では出版されていないマーティンソンの直筆による絵画集から、いくつかの作品をご紹介します。それらの絵からもマーティンソンの世界を感じとっていただけたらと思います。解説のあと、オペラと歌曲集になっている『アニアール』から、全く同じ詩に曲がつけられたものを、それぞれ一曲ずつ、聴き比べて頂こうと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



ハリー・マーティンソンは、南スウェーデンのブレキング地方で 1904 年 5 月 6 日、七人兄弟の長男として五番目に生まれました。片田舎の商家の子として育ちますが、6 歳の時に父が亡くなると、母親は娘二人を連れて、アメリカに移民として渡ってしまいます。1900 年代初頭、スウェーデンからアメリカへ移住する人々はとても多かったようです。ハリーとほかの兄弟たちは、貧しい孤児となってしまったので、教会ごとに区切られていた地区の養護を受けるようになります。ハリーは養父母のもとを転々としますが、そのたびに脱走を繰り返しました。そのようなことは、自叙伝小説「イラクサの花咲く」に描かれています。マーティンソンはイエテボリの孤児院にもわずかに入ったり、カールスクローナでは船乗りの訓練も少し受けましたが、結局そこからも逃げ出してしまいました。

ここに一枚の絵があります。

☆「女性、帆船、そして子供」 これには「母のまなざし」という副題が付いています。背中を向けて手前に腰かけているのはマーティンソンの母親です。そして向う岸から一生懸命に手を振っているのがマーティンソンです。母親が彼を捨ててアメリカに渡ってしまったために、たいへん淋しく辛い思いをしてきましたが、それでもマーティンソンは母親を憎むどころか、ずっと、会いたくてならなかったようです。

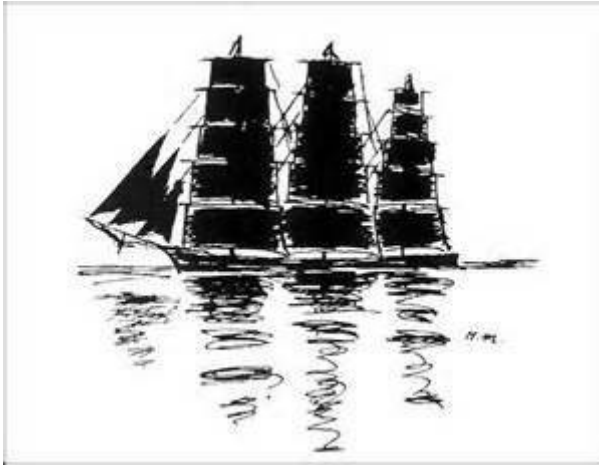
幼い頃に父親を亡くし、母親とこのような形で離ればなれになったことが、作品にどのような影響を与えているかという点ですが、『アニアラ』に関する限り、登場する人物は圧倒的に女性が多く、彼女たちは主体的であり、重要な役割を果たしています。それに対して、遭難船の物語であり、まして叙事詩でありながら、機知と指導力を備え難局へ精悍に立ち向かう、英雄的な男性の姿は見当たりません。

『アニアラ』では、母親が子供を慈しむような場面は全くありません。むしろ、失くした子供を悼んで、その子を誇りに思う母親が登場します。物語には様々な女性が登場しますが、それらの女性の姿をあわせ持ったような存在、すなわち、子を想い、聡明で美しく敬虔で、ときに甘美で優しく、崇高で癒しを与えてくれる誠実な存在こそが、マーティンソンにとって生涯求め続けた理想の女性像だったのかもしれませんが。16歳からは蒸気機船でボイラーの火を扱う仕事をする火夫になり、その後7年間は、インドやブラジルなど、世界中を船で回っています。その間も、大きな港に着くと船から逃げ出し、また別の船に乗り、というのを繰り返して、19もの船を転々と乗り換えています。世界中を旅していたころを思い出したと思われる絵を、幾つかご紹介しましょう。

☆「モルッカ諸島からの水先案内人マゼラン号」1937年☆「フラミンゴ」☆

「原始林のコウゴウインコたち」1934年 結核を患い、健康を害してから、ようやくスウェーデンに帰ってきますが、それでもまだ、ストックホルムやイエテボリを放浪して回ります。こうした様々な経験が彼の後の作品の土台になっているのは言うまでもなく、後に、放浪労働者を主人公にした『クロックリー

ケへの道』という「放浪小説」を書いています。25歳のときに、4歳年上で、プロレタリア文学の女流作家だったモアと結婚をし、この結婚の年に、処女詩集『幽霊船』を発表します。



☆「フル装備の帆船」1929年 こちらがデビュー作『幽霊船』の手書き原稿に描かれた船の絵です。この絵は、ハリー・マーティンソン学会のロゴにもなっております。

☆「無意識の船」1940年 マーティンソンは船の絵をたくさん残していますが、こちらは「無意識の船」という題名がついている面白い絵です。無意識とは何か、を船に喩えて表現したのかもしれませんが。個人的には、どこか、宮崎駿さん原作の「ハウルの動く城」を思い出します。『幽霊船』の次に発表した詩集『放浪者』がとても評価されて、詩人として認められるようになりました。マーティンソンの初期の作品は、形式によらない自由な韻律で、自然の風物を題材にした抒情的な詩になっています。そこには、自然の中に息づく命へのやさしい眼差しが感じられますが、マーティンソンは詩にするだけでなく、草花や虫、動物のスケッチや油絵をたくさん残しています。マーティンソンを愛する人々の中には、恵まれない幼少期を過ごしながらも、澄んだ心の眼を持ち続け、穏やかに自然を謳う彼の姿とその作品に、心を打たれている人も多いようです。

☆「花の上の少女」1939年 ☆「海の中の風景」1934年 ☆「魔女の棲むお話の森」1930年代 この絵には、大きなキノコ、コウノトリ、クマゲラ、郭公、カ

タツムリ、睡蓮、うっそうと茂る杉、西洋アネモネ、森の魔女、などが描かれています。この魔女は、民間伝承に出てくる魔女で、森に迷い込んだ人を、誘惑して殺してしまう妖精のことです。

第二次世界大戦末期の1946年に広島と長崎に原爆が投下され、その7年後にはビキニで水爆実験が行われました。このことをマーティンソンはとても憂慮して、新聞や雑誌に寄稿することで、反核運動を推し進めていきました。ビキニで水爆実験の行われた1953年に、マーティンソンは『チカダ』、すなわち「蝉」という題の詩集を発売します。その中に収められている「ドリスとミーマの歌 29篇」の詩に、さらに79篇の詩を加えて、全103篇からなる叙事詩『アニアラ』を1956年に出版しました。叙事詩『アニアラ』は、マーティンソンが52歳の時の作品ですが、当時、世界はまだ冷戦下にあり、核兵器による地球破壊が真剣に危ぶまれていた時代です。自然を愛する気持ちが強かっただけに、核兵器によって、美しい自然の均衡が致命的に破壊されるのは、何とか食い止めたいと、強く願ったのではないのでしょうか。また、科学技術が進歩するほどに、人々が必要以上に化学技術を信頼し、ときには崇拜してしまうことに危機感を感じ、警鐘を鳴らすことに努めました。この作品は、社会現象と言えるほどの人々の関心を集めました。

☆「チカダとチカダの思い」1953年 余談になりますが、こちらの絵は詩集『チカダ』の初版本タイトルのために描かれた「チカダ」、つまり蝉の絵です。あきらかにトノサマバッタなのですが、スウェーデンでは蝉をほとんど見かけることがありませんので、長い間、誰からもこのことは指摘されなかったそうです。異国情緒を感じさせてくれる虫という意図で描かれたのかもしれませんが。

ハリー・マーティンソンは紹介文にもありましたように、孤児としての恵まれない幼少期と放浪の青春期を過ごした後、詩人・作家としての成功を収め、1974年には作家のエイヴ・インド・ユーンソンとともに、ノーベル文学賞を受賞します。ただ、当時は植民地主義に対する反省から、欧米以外の地域からの受賞者を望む声が強くなり、スウェーデン国内ではスウェーデン人二人への同時受

賞についての批判もあり、それはマーティンソンの作風そのものにまで及びました。繊細な心の持ち主であったマーティンソンはそのことにとても胸を痛め苦悩します。そして最期はストックホルムのカロリンスカ病院にて、鋏で自ら腹部を傷つけたことがもとで、一か月後に亡くなるという、痛ましく、波瀾に満ちた人生を送りました。

マーティンソンの友人であり、医師であった、ラーシュ・ユレンステーンは2000年に発表した回顧録の中で、マーティンソンの最期の様子を、日本の切腹になぞらえた“ハラキリ”と表現しています。とても衝撃的なことですので、今回、この件についての詳細をマーティンソン学会のベックストランドさんと、さらにベックストランドさんを通じて、マーティンソンの実の娘さんであるハリエットさんにも伺ったところ、マーティンソンの自殺は、絶望的な思いから発作的におこした行動であり、何らかの意図をもっての計画的になされた行為ではないとのことでした。ですから、特別な意味とニュアンスを持ってしまふ“ハラキリ”という言葉はふさわしくないだろう、ということです。

ここで少しマーティンソンの死生観についてお話ししたいと思います。もともと北欧は、キリスト教の伝来が他のヨーロッパ地域に比べると遅かったために、文化的に北欧神話や民間伝承の影響が色濃く残っているように思われます。スウェーデンでは「人は死んだら森にかえる」という言い伝えがあり、ストックホルム郊外に遺灰を森に撒いて埋葬するための「森の墓地」があります。

マーティンソンは1930年代、タオイズム、すなわち老荘思想に傾倒していましたので、自然をモチーフにした穏やかな作品が多いのも、その影響だろうと言われていますが、『アニアラ』を見る限りではキリスト教と北欧神話の影響も強く感じられます。マーティンソンはエッセイの中で「死は、眠りのときではなく、終わりを告げる印でもない。それは、時を刻まない、待っている状態であり、私たちの、とても身近なものなのだ」と述べています。『アニアラ』では幾度か、僕たちは「腐葉土」に還（かえ）られる、というフレーズが出てきますが、腐葉土とは腐った葉が土に還り、新しい生命の糧（かて）とな

るものです。ここからも、死というものを終局ではなく、次なる命のために備える期間と捉えているのが伺えます。死と生の間に断絶がなく、死を身近に感じるような死生観は、どこから生まれてくるのでしょうか。その問いに対するひとつの答えとして考えられるのは、やはり北欧の厳しい自然環境が挙げられると思います。

北欧の冬は暗く寒く、雪に閉ざされるので、その状態を文学作品の中では「棺桶の中にいるようだ」と表現することがあります。セントラルヒーティングのない昔の生活では、毎年、冬になると棺桶に入ったかのように家の中にじっとして、春を待つ。春になれば、雪の下で死に絶えていたような草木がまた、再び豊かに芽吹き、花を咲かせる。そうした環境が、自然という大いなる生命の中に、人の死も共にあり、繋がっているのだという死生観を育んだ一つの要因ではないか、と思われます。

2004年には、ハリー・マーティンソンの生誕100周年を記念して、生命の尊厳を表現した東アジアの詩人に贈られる「チカダ賞」が授けられています。これまで日本人は、宗左近（そうごん）氏、金子兜太（かねことうた）氏が受賞され、昨年度は、詩人であり研究者でもある、城西大学理事長の水田宗子（みづたのりこ）先生が受賞されました。

☆詩人・作家としてのマーティンソン ハリー・マーティンソンという名前を今日はお聞きになる方も多いと思いますが、実は、マーティンソンはとても日本と関わりのある詩人です。まず何より、この叙事詩『アニアラ』を書くきっかけのひとつが、さほど申し上げましたように、広島と長崎への原爆投下だったということです。宇宙船アニアラ号は「ホンド小惑星」との衝突を避けるために急回転したことで、軌道はずれ永遠に宇宙をさまようことになりませんが、この「ホンド」という名前は、原爆を受けた広島のある、日本列島の「本土」に由来しています。また、第51篇で、東京の古い呼び名である「エド」から来た「エディス貴族」の美しい女性についても述べられています。

二つめは、スウェーデンアカデミーの会員であったマーティンソンは、当時、国際ペンクラブの副会長をしていた川端康成とも親交がありました。マーティンソンが1962年に来日した折にも会っていますし、1968年の川端のノーベル文学賞受賞に関して、少なからぬ影響を与えたのではないかとされています。この二人は、年齢も近く、幼い頃、家族に恵まれなかったことや、モダニストであること、ノーベル文学賞受賞後に自殺している点など、不思議と共通点も多くあります。

さて、マーティンソンと日本との関わりの3つめは、マーティンソンが日本画や俳句への関心を抱いていたことです。マーティンソン、スウェーデン詩壇にモダニズムを紹介した一人ですが、モダニズムとは伝統を否定した前衛的な芸術活動を指します。詩では、形式や韻律に捉われない自由な詩のことを意味します。モダニズムの発展において日本文化は、西欧文化へのカンフル剤のように大きく作用しています。絵画で言えば浮世絵、詩歌においては俳句が挙げられます。詩では、言葉や、言葉の組み合わせから生じるイメージを重視するという文学運動が occurred しましたが、そのきっかけは日本の俳句でした。

スウェーデンでは1933年に、俳句が新聞紙上で初めて紹介され、詩人たちの間で、俳句や日本が、浮世絵は、関心の的になりました。マーティンソンも円山応挙や葛飾北斎の絵について、自由な形で詩に謳っています。

スウェーデンの詩は、モダニズムを取り入れた1930年代を堺に大きく変革します。「メタファー（隠喩）の巨匠」と呼ばれるスウェーデンの現代詩人トーマス・トランストロムメル（トランストロム）の作品もまた、こうしたモダニズムの流れを受け継いでいます。

☆「**アニアラ**の叫び」1956年 マーティンソンの活躍した時代の少し前からスウェーデンでは、文学・音楽・絵画といった芸術は、相互に入れ替えが可能であるという考えのもとに、絵画や音楽の手法を文学に取り入れる試みがなされました。俳句が人気を博したのも、言葉によって風景を写生するという絵画的性が、高く評価されたからです。「アニアラからの叫び」と題するこの絵

は、詩を絵で表現し、絵の中では音を奏でていきます。なかなか象徴的な絵ではないでしょうか。

☆叙事詩『アニアール』について 叙事詩『アニアール』は、フランス語版では「宇宙のオデュッセイア」という副題がつけられているように、一つの大きな物語の詩となっていますので、そのあらすじをお話ししましょう。

物語は、放射能汚染された地球から脱出し、移住先である火星に向かう場面から始まります。宇宙船アニアール号は、ごく正常な発射ではじまった脱出旅行ですが、不慮の事故で、火星まで行くはずだった軌道を外れ、そのまま修復不能となり、永遠に宇宙をさまよう旅となります。地球は物語の中でドリスと呼ばれ、第一章の初めにだけ登場する女性もまた「ドリス」という名前です。宇宙船内には、科学装置の「ミーマ」があります。それは内部に生命細胞と心を持っており、懐かしい映像をスクリーンに映して、不安にかられ、動揺する人々の心を癒します。多くの人が「ミーマ」を崇拜しますが、人のもつ残忍な心ゆえに、ミーマはやがて崩壊していきます。船内には、先行きを真剣に案じる女性パイロット、快樂を求めて踊る人々や新しい宗教のカルト集団、独裁者、天文学者等が、思い思いに行動します。そしてその様子を「ミーマ」の機械担当であり、名前を持たないナレーターの「僕」が語っています。

ドリスという地球では、フォトターウと呼ばれる、閃光と灼熱の爆風を伴う力によって、ドリスブルグという一つの街が破壊されてしまいますが、これは一説には、核兵器を暗示していると言われていています。また、ヒットラーをほうふつとさせる独裁者の登場や、ホロコーストの処刑場を想起させる描写もあります。一方、この作品の全く別の読み方として、宇宙 SF サスペンスドラマとして楽しむこともできますから、読み手によって解釈や楽しみ方は限りなく広がっていくと言えるでしょう。

全体の構成としては、時間の流れに沿った船内での様子の描写に、過去の記憶、語り手の思想、歌や詩、架空の宇宙歴史の叙述などが交錯しながら、物語がすすんでいきます。こうした構成は「意識の流れ」と呼ばれる心理学の概念を、文学的手法に応用したのではないかと考えられます。これは、人間の意識や

思考は、常にイメージや観念・想念が交錯して、流れるように移り変わっているとこの考え方を、文学での叙述に応用することです。

叙事詩『アニアラ』は、発表の3年後にはマーティンソンの原作をエリック・リンドグレンがオペラ用に編集し直し、カール・ビリエル・ブロムダールの作曲でオペラが上演され世界的な成功を収めています。1997年にはカール＝アクセル・ドミニークの作曲により、ジャズとスウェーデンの民族音楽を融合させたアニアラの歌曲集もできました。

☆「僕たちは地球という～」詩 これからお聴き頂く二曲は、同じマーティンソンの詩を用いながら、全く違う音楽に仕上がっています。どちらも「僕たちは地球から来た」という、地球を懐かしみながら自らの死の意味を問う内容の詩ですが、オペラは、冷ややかな暗黒の宇宙にさ迷う不安や困惑が現代音楽によって、みごとに描き出され、歌曲集の方は、懐かしい地球を思い出している瞬間の心の喜びと高揚感が感じられます。では、オペラの序奏曲とそれに続いて「僕たちは地球からきた」をお聴きください。曲をかけている間に、初演当時のオペラの写真をお見せいたします。

☆オペラ 次に歌曲集よりお聴きください。☆もう一度「僕たちは地球からきた」

では、私の解説はこれで終わりです。

これから朗読いただく箇所は、アニアラ号が地球を出発してから遭難するまでの1~4篇、宇宙をさ迷う人々の心を科学装置のミーマが懐かしい映像で慰める5~7篇、人々が次第に己の運命を受け入れ始める8~11篇、さらに、地球での懐かしい日々を思い出し詠われた74篇「カレリアの詩」と86篇「ゴンドの歌」、そして、最終篇の103篇です。

それでは、女優さんによる素晴らしい『アニアラ』の朗読をどうぞお楽しみください。



少し余談になりますが、ノーベル賞を設立したアルフレッド・ノーベルは化学者でしたが文学にも造詣が深く、バイロンやシェリーの詩が好きでした。ノーベル賞に文学賞があるのは、ノーベルが文学を大切に思っていたからとも言えます。これまでノーベル賞を受賞したスウェーデン人は7人いますが、そのうち詩人は4人います。残る3人のうちの一人 ペール・ラーゲルウ¹ イストは作家として受賞していますが、詩も書いていますから、いかに優れた詩人が多いか分かります。スウェーデンでは、とても詩が愛されていますが、その一例としては、1931年からずっと日曜日以外の毎日、お昼の12時に、詩を朗読するラジオ番組“Dagens dikt”（「今日の詩」）が放送されていることが挙げられます。